

練字生天



緑字生ズ

題字 加藤郁乎

詩篇

供儀の船 小岡明裕 2

聖樹の森 岩井 薫 8

オルフェの自白 中村文昭 14

海の器の部 桑原 徹 16

佯狂 牧村則村 18

旅人と無限 福原哲郎 20

緑字生ズ 紙田 彰 25

デリュージョン・ストリート 紙田 彰
back cover

毀れゆくものの形 紙田 彰 38

直江屋主人曰く 68



美術協力 直江屋主人

写真 (p.13) 神谷俊美

絵画 水津 燧

水都の夢 oil on canvas 305mm×255mm
(表紙/扉/裏表紙)

黄昏の時 oil on canvas 305mm×255mm
(p.25)

自然科学のポエジー (I, IIより2点)

ペン画 243mm×45mm×2 (p.7)

カット (p.17)

供儀の船——Sに

小岡明裕

濃霧の街

暦

眼、濃霧の街。
見ることをやめて、ひねもす、石に眼のことは刻む。
幻視のはての失明、ちりぢりの虹の夜。
風が来て、またしても霧、たちこめる。

*Elle est retrouvée !
Quoi ? l'éternité.
A. Rimbaud*

I
七つの海。七つの空。

薔薇色の矢印が旋回している白い地図。
水晶の權。

眼の埠頭へ、もりあがり疾駆してくる無数の白馬のたてがみ。
背後では、あんずの薄衣を着せかける弓なりのイリスの息づかい。



わたしは、愛する。

暁の向こうの黒々とした野生の薔薇、背の高い不妊の女を。

だが、海の雲母の場所が夏至の槍に貫かれるときを風の傾斜で測ってみれば、季節はずれの大鎌が、森の寶石の屋根から漆黒の青みを切り剥し、船という船を泡立つ緑の獣の方へ押し流したばかり。大檣帆の蝙蝠を飛び立たせる法螺貝の響。

游泳にふさわしい浅い水の上での睡り。月下の暗礁。

しぶく海の上に、壮麗な寺院を建てるのは誰か。

やがて夜明けの粘液とともに、失われた時が滲み出してくれば、女は、わたしの昏の上に新しい塩をおいて立ち去るだろう。

陽は、いまだその正しい名をよばれたことはない。

イリスはいう——波が風にかぶさった音は、へわたしたちは二人だった——ことを思い出させると。

III

遠い昔の海の刺繍。化膿する潰れなき開花の時間。

そのような、いわば死海の岸边での幼年期、発熱も憔悴もない泉の上に、棕櫚のうちひらくときがあった。

暁の馬を解き放つ満潮の直前、天空の大橋のねじれが、幼な兎に命令する。

若い女！

死の砂の円蓋のかわりに、ときならぬ絹の海の騎乗。炎の垂直に立った背骨。

行きどまりに、二つの帆柱をかかげた難破船の倒立像。海の極致の青をめぐけて、大地の静脈が走ってゆく。

脂肪の、かぐわしい棲処。

投光器による外科手術。

窓と鏡のはざまにただようイリスの影。

生命のもちまへの色彩が褪せるや否や、手術台の脚は、流れる水の斜面で洪水の光に照り返している。

造船台の孤独の緋色。

天体の帯。

IV

朝、巡礼の人。彼の肉は屠られた。植物と海。花崗岩の浮島。

夏のない母胎の牢獄のなかで壁という壁に幾何学のアナグラムを刻みつけた。そのはるかな直線の記憶の交錯が、白い版図の上にこうした航海の軌跡として甦ったいきさつは、白衣の暗殺者の見開いた二つの眼が、ゆくりなくもたつたひとつの黒に還元された巡礼者の土地に、徒勞の羊歯の生い茂る光景をみとめたからにはかならない。

秋にもかかわらず、暁方のたびに流産してしまう現実。わたしの捨てた胎児。

イリスはいう——巡礼者の墓は、へわたしたちは二人だったことを想い出させると。

わたしが生み落とすことのできるのは、無疵な畸型児。

薔薇の林檎のふとももから、風に吹かれて船は発つ。まことこけの雲を射ちさす。
龍骨のない巡礼の船。宇宙の不在の中心への進軍——世に異議を唱へず、無事の運送
ファンファアレー！

風。ボマスの海を渡る。木製の船でなかつたが。

石。

火。はせる棕櫚葉。はためく帆布。

風をきいて、三十二の方位を読む薔薇の声。

船は、こうしてエナメルの海に無名の単純性を繰り出して居る。
——それだけに、船の暗い夜のことなど誰が知ろう。

存在の慎しみ。しかしおそろく、時間のなかでのとらえようのないロカイユの繁殖。白い瀬。

シレーヌは水平線に約束の土地をさがす。

いつしか、降りしきる雨。

降ってくる哄笑のなかの白茶けた夢。女へのもうひとつの夢は、もはや海の上には見えなかつた。
イリスはいう——夢の海のひろがり、はへわたしたちは二人だった。ことを想い出させると。



さあれ、どもりの水夫の影なき肉体が島に泳ぎつくとき、海は何を与えるか、岸边に向かって駆けよる白馬のほかに。

おお、パトモスの驚の青は魅惑する。

弓をとれ。權は天体に向かって高々とあげよ。

曙をとろかす海。不条理の王。

わたしは、切り裂かれた赤い絹積雲の空で失速し、わたしでない何かであるべく、海の方へ――

まだ処女のままの白地図は、その続きをみるにちがいない。

VII

へわたしたち二人の二重の無意識がそこにいつそう深めている。眺望は、白。降りそそぐエメラルドの黙示。

七つの海と七つの空の陶酔の朝。炎の夜明けと惨劇の日没の巨大な複眼は、(夢の岬)の沖あいに二本マストの船を見いだす。

濡れた甲板に横たわる紫水晶の權。

諸大陸を制覇した船団の凱旋を見るのは、宝石のたそがれ、黄金の驟雨のあとか。

地球には、昔日の名残りの花々が一角獣の火の攻撃に追いやられくずおれてゆく海へのおびただしい傾斜がある。

海原に咲き乱れる花々は往きかう船をことごとく、挫折に災禍に駆りやって、なお、無限の追憶のおとずれがもたらしている極彩色の韻律は、浪費のように花々の霊に捧げられている。

イリスはいう——へわたしたちは二人だった」と。

おお、創世の揺籃期、善徳と白地図。

黒い天使らよ、精神は形なき宇宙に明滅する星々の謂ではなかったか。またそれなら、肉体とは海をわたる一個の日焼けした憔悴ではなかったか。

希望の岬と、黒い血の煮え滾り。海と、系統樹。

砒素のはしけ。

エーテルと水でできた船の永遠。

A 暦

燃えあがる街。陽炎がゆらめき、

いたるところで、砂嵐と龍巻が立つ。

灰となって降りかかる書物。

永遠の水曜日。

le 16 septembre, 1984.





聖樹の森

岩井 薫

巨大な山脈の麓から森は始まり——牛乳の表面に固まる皺だらけの皮膜を思わせる、岩肌の無数の擦痕が誘い入れる水河渠の迷路の奥に突きつけられた水の刃、これが滾々と湧いて森を育む水源である——清冽な水流や湖沼によって僅かな裂け目を呈しつつも、幾百里におよび丘陵や平原をのみつくして拡がり、大砂塵の吹き荒れる珪酸質の曠野の始まる所でそれは尽きている……。

森をさまよう不思議な旅人が聖樹と呼び、その意味を知らない《森の子ら》がムルノキと呼んでいるのは、幹囲十米、樹高五十米に達し、濃緑色の光沢ある大きな楕円形の葉が樹冠に茂る巨大な常緑高木である。初夏、枝端に咲く花は径三十糎、瑩白色の八片の花弁が平開し、花心に多雄蕊に囲まれて直立する子房が花後、長さ二米もある剣の鞘を立てたような長莢状の乾いた果実となり、《森の子ら》はこの果実を食物とし、森をさまよう旅の者はその種子を求める。

小葉が羽のように並んだ茎を聖樹に絡ませ、茎頂に淡紫紅色の花を咲かせているのはジャコウカズラである。花筒の口が五裂し、赤斑のある大きな副片が垂れ、狭小な四片が振れて立つその花は、よく蜜を分泌し強い芳香を放つので蝶を誘い、翅表がびろろど様黒色をしたオオヤマヒメが後翅外縁近くの七つの紅色弦月紋と長い尾状突起を裳裾のように翻して飛来し、前後翅に連なる銀白色帯があるギンスジタテハや朱色のアケボノマダラ等と争って吸蜜しているのが見られる。

森の木蔭には羊齒植物が群落をなし、銀白色の斑が爬虫類の紋様のように入った細葉のジャモンシダや、黒褐色の斑入りの大きなヒョウモンシダが地を蔽って繁茂している。葉をよく見ると左右に伸びた異様に細長い四翅を羊齒の複葉に擬したシダムシがじつとしてゐる。羊齒の下には、遠い昔、森を抜けようとした交易商人達が残した荷車の残骸が海底の難破船のように横たわり、腐蝕して溶けかかった、人物の肖像を刻んだ山なす銅貨や交易品の残滓などが散在し、また古い人骨が、敗退して森に逃げ込んだ軍団の末路であろう、ぼろぼろに錆びた武具をまとったまま白く晒されている。

森をさまよう旅の者は《影》と名乗り、単独か、あるいは二人か三人連れて荒野の彼方から聖樹の種子の採取が目的ではるばるやって来る。毛織の粗末な外衣に革のサンダルを穿き、野営に必要な旅仕度（火打ち石、錫の小鍋、乾燥豆等）を背囊に入れ、「聖樹の呼びかける声」を尋ねて旅をするという。

初めて森を目にした《影》は、《森の子ら》の幼い者が生れて初めてオオヤマヒメが蛹から羽化する姿に接した時に似ている。空遙かに枝を伸べ、地の闇、影の領域に深く根を下した聖樹について、彼はおびただしい時間を費して熟考し、想像し、夢見てきたのであるが、たとえば聖樹の「森の聖樹は至る所に隣り合って立つ、同じ一つのものである。相識することの決して無い、同じ一つのものと呼びかける声が、森の中では常に同時に、あらゆる所から聞こえてくる」という一節を、今まで自分がいかに誤って解釈していたかに気づいて悄然とするのである。

森に着いた《影》を迎えるのはまず多くの鳥類である。朗らかな連続音を樹間に反響させ、長い嘴で木の幹を叩く白い胸のククノチ。澄んだ声で優雅に囀る小鳥達——鮮黄色の胸、黒い上体に白斑のあるホシビタキ、聖樹の小枝の枝わかれした所に釣鐘形の巣をつくる琥珀色の可憐なクラモチ、そして、森を颯と吹き抜ける風が紫地に鮮美な臙脂斑のある軽い翼を吹きあげるヒシヌイ。また、林間の沼や溪流等の水辺で水棲昆虫や小魚を狙って飛翔する翡翠色のルリセミがいる。

昆虫類も多い。金緑色光沢のある翅鞘に赤銅色の円形紋を持つ細長いタマツクリや、黒い小紋を散らした朱紅色の翅鞘もあざやかに、後部に反った触角を長くひきずるコニキシ等の甲虫類。透明な翅に褐色の斑紋があり、異様に長い触角を振ってばさばさ飛ぶツノゲラ、展げると三十程もある薄紗の翅に砂金をまぶし、金泥を刷った巨大な複眼と金の矢のように細長い胴部をしたコガネヤンマ……。

夕映えの光が聖樹の梢を茜色に染める頃、《影》は野営の準備に忙しい。薪を集め、樹の根方や大きな樹洞に枯葉の寢床を作り、水を汲んで乾燥したノラマメを煮るだけの簡単な食事を済ませる頃にはもう、陽は沈んであたりは暗くなり、営火に誘われて、枯葉色のマガラコノハ、全身黄色で触角のみ赤いウコンシタバ、そして体は紅色で太く、翅は緑地に真珠層様の銀色波状紋があり、細長く反った前翅端を豪華な衣裳のようにはためかすヨミスズメ等の蛾類が集まって来る。

そして夜の生き物達が活動を始める。小鳥の巣を狙う敏捷な小獣ノズチや、草叢に潜み細長い鎌首をもたげる爬虫類のイヒカ、草の実を噛む小動物ツラネ、沼の緑藻類の中にゼリー状の卵塊を産み、夕暮れから喧しくキュルキュルと鳴き始めるカワボウズ、音も無く闇を飛翔しては鋭い

嘴と趾でツラネやカワボウズを襲う猛禽のアカメズク等の大小の目が闇にせわしく点滅する。

朝、立ち籠めた霧を幾条もの光の幅が刺し貫き、樹の幹の窪みに蘚苔類でつくった椀形の巢に青緑色をした球形の卵を産むヒシヌイが囀る頃、《影》が枯葉の寢床で目を醒ますと、《森の子ら》が集まって、夢の番人達のような風情でおとなしく待っている。《森の子ら》はその名の通り大部分子供ばかりの奇妙な種族で、平均寿命は十五、六歳位であろうか、成長して子供を産むとほとんどの者が死んでしまい、赤児は兄や姉達の手で育つ。木の棘で留める簡単な衣服を木の皮で作って着るが、裸足で、生まれてからずっと伸ばし放しの髪にジャコウカズラの花を飾っている。

《影》が聖典を読んで聞かせると、《森の子ら》はムルの実の枯莢にカムズミの漿果を詰めて発酵させた酒を嬉しそうに回し飲みしながら《影》のあとについて繰り返す——

聖樹の種子 翼ある星よ

洞穴に隠れ籠った秘密の言葉の種子

蔓で編んだ揺籃に眠る星の種子

至る所から長きにわたって吹き寄せる風に乗って旅立つ……

聖典を読んでしまうと、《森の子ら》は聖樹に攀じ登って樹下にいる《影》の所へ次々とムルの実を投げてよこす。

固いまっすぐな実は厚い莢えいになっており、その太さは腕位、長さ二米もある。莢の尖端は秋に熟して裂け、白い冠毛をつけた種子の束が絮わたになって飛び立つ。《影》が求めるのはこの飛び立つ前の種子の束で、この部分だけ小刀で削ぎ落として小さな皮袋に大切に詰め、あとは《森の子ら》に返すと、果肉は食用となり、枯莢は瓶びんの用をなすのである。

ムルの実を腹いっぱい食べ、カムズミの酒に酔いまどろむ《森の子ら》をイヒカやノズチを防ぐために作られた樹上の寢床に残して、種子を手に入れた《影》は背に稲妻の光を浴びて森を去らなければならない。彼は首から下げた小さな皮袋に、ただ木の種子を入れたのみならず、「闇における生命の閃光せんこう、彼自身の意志の源である深い夜の意識に封印された中心の星」が肉化したものを手にしたのであるから……。

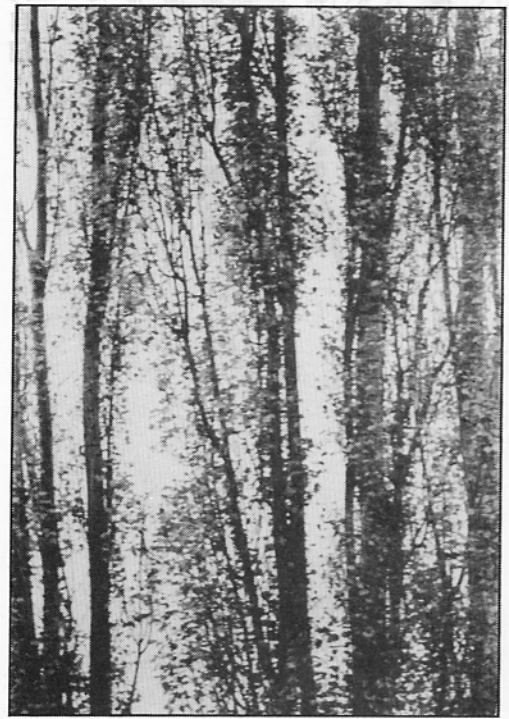
聖樹みかどの実の収穫が終り《影》が去った後、ジャコウカズラの花が散り、宿存花柱が羽毛状に残る。それは森のそこかしこで枯れた茎にだんだん白色を呈し、午後、垂れ籠めた雲の裂け目から落ちてくる光線に映じて雪の花のように輝いている。

聖樹の実の収穫が終り、宿存花柱が羽毛状に残る。それは森のそこかしこで枯れた茎にだんだん白色を呈し、午後、垂れ籠めた雲の裂け目から落ちてくる光線に映じて雪の花のように輝いている。

歌は遠く林道に響き、強は赤川に響きと
 響き心は赤川に響き、強は赤川に響きと
 和歌はルーツから響き、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと

和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと
 和歌の足跡を辿るナ、強は赤川に響きと

オムム
 の
 足跡



オルフェの自白

中村文昭

弓は二極に雪をわった

ふるえる余白は水子の表・面・張・力

真珠の脱糞！ 闇へはじく

とおのく矢印に限りなく泡立ち濺む運河

自殺者の鋭い残雪 “まるごとかき切ってはいけない”

標的の卵を産む（黄味をおよぐ）水鳥の水掻きを凍らし

“恋”とよびかけるな

殺しても所有できない速度が暗黒なんだ

自転する強度の樹木……一人で二人・顔音の蛆渦？

魂はまっすぐ織く揺れている

誰ダ一体？

光のサフランを切りきざむ彩度の包丁

舞姫の墓石が蒼空を呑む零度の声（誰ダ一体？）

パレットの戦場を

口紅よ

青年は食卓に咲く真空火花を瞬間かきあつめる瀕死者！
たちまち水面は便器 龍は流れる

赤い運河が洗濯する女たちの月経帯と
錆びた斧を打ちこむ天使の根をぬく 穢れた手と
人肉フルーツから慧星のすっぱい記憶へ
肋骨の長距離ランナー（骨は笑う！）は
一房の宇宙 無絃の竖琴を擦過する

「死」は白亜紀の旗をふる……
はずむ歯の走路は血をなめす……

無知！ あれは雪明りを踏む登音
極北へ舞いおちるエウリディケの羽根が触れた
オルフェの金属だ

とおのく矢印に限りなく泡立ち激む運河
自殺者の鋭い残雪 “まる”ことかき切つてはいけない
肉体は動ずむ四本脚のうみである

星の辞典 海の器の部

桑原 徹

I 蛸と宝石

臓器の下に宝石をかくして蛸が泳ぐ 海には太陽が沈む
ダイバーが海にもぐるのはこの時だ 海面では赤い水が砕け散り
海底で器の中に手をつつこんでとるのは蛸と濃い緑の石だ

II 死んだ海の器

器は口を開いたまま永遠に沈黙している
客は器を買ってゆくとその口に口を押しつけ 宝石のありかを確かめようとする
だが暁近くなっても舌の先に触れるのは碧い海の味だけだ

III 女神と二枚貝

器の中の器の美しい器に海が必要ないように
女神が宝石を必要としていることを知って人は海にもぐる
この小さな器と言えどかたちは肉の構造に由来している

IV 女神像

最後に降りていった者も二度と帰ってこなかった

こんな書き出しで終わる物語も二度と生まれなだらう

ああ 海の阿片よ 娼婦はこう言い終えると自らの器を祭壇の女神に返した

五期作の断片の書き
あまをばあかしくつづけ

V 目を開いた女神

美しい器を割らずに内部を見られるか ついに裸体にはならなかった女神よ

口ははじめからおのれのものか 問いかけには応えず女神ははじめから目を開いたままだ

聖神のたままの姿に
海へゆく

歌の死体と身をひそめて
おとよの娘を喚ぶ

口ははじめからおのれのものか
問いかけには

目を開いた女神
美しい器を割らずに

内部を見られるか
ついに裸体には

ならなかった女神よ
口ははじめからおのれのものか

神玉



佯 狂

金雀児エニシダの

棘に鎮める海を
目に染める



牧村則村

いわれなく
花にも狂い 狂いながらなおも
歩いてゆく

臆病者のおまえの姿に身を爰し
おまえと見紛うほどおまえに恋焦がれ
エニシダのへ時

花ちぎり

花咲いっつ海への径を
喘ぎ 喘ぎつつ敢えて犯される悦びの不誠実さで

あえかな時の遊び

そのマメ科の戯れ悪ふざけのいま時分
(狂い咲け! たわむ枝々)

追つてゆく 追われてゆく

私の

影の影

（幻）か

おまえを嚇かしつづけ

おまえを驚かしつづけたものの正体は

身体の奥底に

隠し 隠されつづけたものの真実は

海へゆく

黄の花蔭に棘をひそめて

狂おしく 焔を病んで

（魂を脅かすこのエニシダの

繚乱と狂乱の絶句の枝に

乱舞する幻は

一つのことしか（夢）見ない私への

多分 罰なのだ）

淋人（無題）



淋人（無題）

旅人と無限——私のヨブ記——

福原哲郎

3 時代と魂

時代は進む。多彩な潮流をくり広げ多くの建設をなしとげながら。

しかし、やはり魂は

この世の糧だけではみたまされないと。

それなら、天上の淨い糧は

どのようにして成就されるのか。

人間のこの社会での複雑な営みのなか

そのどこで、存在への許しがくだるのか。

どこで人間は「あなたの存在にも

深い意味がある——」という声を聴き、

しみじみ感謝することができるのか。

人間のこの世的なあり方にすぐにはなじむことができず、

人間という最も多様な存在のなかで

太古から現在に到るまで

さまよい続けている可哀そうな魂よ。

魂はこの地上では、容易に安らいの住所を

見つけることができないと嘆くのだ。

魂はもろもろの時代のなかを

さまざまに人間のなかを、多くの旅をして

ひたすらに考える。

魂は何のために地上に生れるのかということ。

人間の地上において

最良の建設とは何であるかということ。

魂を想う者は試練に出遇う。

魂の完成を夢見る者は試練に出遇う。

それは人間の歴史では

時代の要請と魂の要求が一致し合っていたような、魂の黄金時代が存在しないから。

時代の内部にはつねに空虚と悲惨がみちている。

神が承認する時代は一つもなく、

魂の証言に耐える時代は一つもない。

魂の声に耳を傾ける者がどんな試練にも遇わずにすまされた幸運な時代は

かつて一度も存在しなかった。

そこではつねに魂の全体の満足が欠けており、

そこではつねに最後の郷土が欠けている。

このとき、人間の魂はこの地上にあって

どんな遍歴ののちに、どんな場所に、
その仕事と本来の安らいを定めるか。
この世の数ある旅のなかで魂は
自らの望みを果すために
どのような旅を体験するだろう。

魂は私たちの地上において
貪欲にむさぼることでもなく、
緑の大地に腰をおろしてただ健やかに落着くことでもなく、
自らの遠い来歴と、隠されていた使命に従って
母なる大地をはるかな領域に貫き、
まずそこに落着くことを願っているかのようである。

男の魂は、より高く
より清澄な燃焼にこがれ、
広々とした思索と瞑想を求めて
万物の様相を見通すことができる高き山々の頂きに、一人登ることに憧れる――

女の魂は、生命の豊かな循環と
甘美な結合の神秘を想い、
始原のふるさとから誕生した一切のものを抱きしめることが可能な世界の淵であることを願って、

どこまでも広く茫洋とした
愛の海原として拡がることを夢見ている――

魂はそこで何を見て驚きの声をあげ

そして、何を想うのか。

どんな創造の願いに動かされて

ふたたび魂は、日夜

その美しい胸をこがすのか。

21 愛 (I・パート3)

あなたは一体誰ですか

わたしたちの地上には 何人も

あなたのような人が歩くのです

あなたに苦が見える

正直な苦が

人間の苦や世界苦が

あなたが流す涙は

どんな父もとめることができな

どんな母もふきとることができない
だからわたしは 心の中で「神」を呼びに行く

あなたは 拒絶と抱擁とのたえまない渦の中を生きていて

あなたはまるで自分が主人ではないかのよう

未知な勢力によって揺り動かされている

あなたの身体の周囲には いまでも不気味な

不可解なものが残されていて

それでわたしは あなたに対して

外側から入っていくことができます

あなたはいつからか絶対の風貌を身につけてきた

あなたの心には壮嚴な白がある

その周囲にこそ多くの微妙な色彩をもっている

思ふに 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か

あなた 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か

あなた 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か

あなた 誰か 誰か 誰か 誰か 誰か

あれから数年後のある日の午前三時、寢床の中で夢うつつにして謎の天人五衰を妄想分析していた。／聡子は権力構造そのものであり、透と狂女は肉体と精神、美と醜との両義的な一致、あくまでも透は転生の真物。これら六十年間の時の捷徑が本多の夢想であること。肉体の美と精神の美をともにもつのか、肉体の醜と精神の醜をともにもつのか、いずれともつかぬ不可解の胎児、生きて誕生するのか死児となるかも不明のまま、本多の夢想が子望として透と狂女の間を生んだ唯一の現実がこの書に存在していないがゆえに、確乎たる存在として、本多が、いや三島由紀夫がそれに賭けているもの。／豊饒の海が本多の邯鄲夢であり、その本多を夢見るのが三島であるならば、肉の衣のその中に、人に知られることのない *Manxun* への暗い、熱烈な情熱が。／*Nahios* の文学。外に現われることを極力押し止める密教的な匂い。自決さえ肉の衣であってみれば、自己顕示欲などの下司の勘ぐりどく吹く風、*disgrace* された反面教師としての暗鬱たる情熱に支えられていたことは……。／それこそ永生する人民、愚昧で醜悪である人民と、それゆえの彼らの革命的な情熱の至純さに、まるで対極的な存在、つまり透を注入し、革命という畸型児を現出せしめようとしたのではないか。自らの死が何ものをも動かさざることを、人民は愚かで醜く、世界は聡子のように傷つけられることもなく、すべてが夢想の謔言として片づけられることを了解しつつも、肉体に精神を注ぎ込む、あるいは精神に肉体の鎧を着さしめるといって、三島由紀夫の最後の夢想を自死に託したのではないか。／あの夢想する鼠の話という陳腐さこそ、三島の、左翼に対する唯一の願い。だが、左翼の現実こそ、永生の衣をかぶった不純さ、俗物性。三島は夢想の革命を、時間という腐った現実と対する唯一の願ひ。だが、左翼の現実こそ、永生の衣をかぶった不純さ、俗物性。／文学的な質の高さからは春の雪がもつとも優れ、作品の力という意味では天人五衰が傑出している。そして三島由紀夫の偽装の極みが奔馬の勲である。だから、三島の本質的な偽装としての勲は革命的であり、そこに肉体に対する決意が、自決に至る人生が決定つけられたのではないか。晩の寺は箱晦であって、この部分には何の愛着も抱いていないようにもみえる。／三島由紀夫の人民への愛、絶大なる共感ほ、洩れそうにならばなるほどに陳腐化され、諧謔化され、意識的に隠蔽される。安田若での嬉々とした様子を思い起こせばよい。左翼に抱いていたと流布された三島の危機感とは、左翼の自惚れとも、被害妄想云々の鈍感さとも隔絶した、彼の左翼に対する愛ではなかったか。／天人五衰の難解さは、三島由紀夫の戦略的な動揺によるのではないか。結局、三島は情熱に戦略を与えようという、夢想の交接に落ち着いたのかも知れぬ。／晩の寺が箱晦だというのは、大乘仏教の研究という裏返し姿勢、つまり神道でもなく、武士道でもない、完璧に三島とは無関係なものを、独力で思想の形にまで押し上げるという、三島の実質の力を証明したこと。その力量からする *Marxism* への理解、本質的な到達、それゆえに仏教という衣によって完全に蔽い隠すということ。三島由紀夫は自分に役割を与えた。誰に気つかれることもなく、まるで反対極のように身を置いて、悪の権化になって、本質的な状況を生み出そうとしたのではないか。／ここである俗説を思い出す。 *Kory Marx* はイギリスで炭鉱労働者を目のあたりにし、彼らがあまりに動物的な悲惨さのうちにあり、その存在の気味悪さに生理的に膺かされ、彼らをまるで自分とは違う生き物、唾棄すべきものと感じ、嫌悪感という貴族的な立場から、つまり獣以下の汚らしい人種を抹殺すべく資本論を書き上げたというのだ。

緑字生ズ

85

信に曰く

人生は無敵、ただ鉄片

Otonの光が

男の眠りを照らす

こわれやすい彫像

戸棚の中の

86

アトロポスの鉄のままに

男は旅に出るだろう

アラウカニ帝国の末裔に会うだろう

甲虫の絵を描きつつけるだろう

喘息の、探検家よ

87

運河の見える駅で下車する

街には針が流れている

その家を訪ねると

青い柿の實の首 グランドピアノ
鍵盤上で脚を広げ、ウイंकする女
肩が、ガラス細工のように透き通った

乳の河 怪物の森

イモムシのことを考え

黒いパイプを掌に包むと

生涯は煙

いたるところの駅に

星涉りの似顔絵が

88

ポーモーナ、果実の奴隷

幼きもの美しきものの肉市場

透明な白樺 ニンジン色の舌

雪よ、貝類の毒

少女の媚態

ぶらぶら頭蓋骨、炎のような喉

雨後、寒冷地ではミソサザイが鳴く

89

にわたずみ

反射鏡の向こうに

さざらめの気圏

天田地方、チューリップが立つ

磁気あらし

蒼白な溜息

紫外線と、流れゆくものの細菌

90

首には菌型、象牙の肌

天門を照らす眸、掌は産卵期の貝

はまふゆくたりよ、みよむたり

つつめしおんばりおん、だだびじおんたるべお

息吹けば、冬

91

三百六十五人のムネーモジュネー

穴居人は知らない

少女をかどわかす暗黒を

歳月の円周率を

白夜はつづき

冬、地下深く、百足のよう

92

夢精の夢の *eterna*

野ごしらえの花、花びら

白い牡鹿、スリッパ

鍾乳石

野ネズミ

まつさおな首

急に天秤にかかるもの

93

元氣とともに生まれる

奇妙な野菜のジュース

雨降りの日、大陸では

赤と黒の斑点を吹いて

人死にがあつたという

九元真母のうち巨霊という神

とのぐもる空を裂く

運命の使者とは

カラスなのかトキなのか

安楽椅子と加速度 胸のうち
 アルファに *manjima* ベーだよガマン
 想いは棟上、真夜中の十字架から石つぶて
 ふぐりびとと *Women's Lib*
 塩の話なんてでんでしおらしいので
 アホウドリが盲目になる

神仏不合 粘膜のような魔性
 時間とに ω 子の聖体拝受
 ω 子といえは θ 子と同衾する
 白子のミッチと同じ 幽霊的存在
 ひきしろう十三番目の死体にパンツ

クジャク! という声に振り返ると 太陽が破裂
 しそうな勢いで落ちている 女はそのとき眼を伏
 せしやがみこんでしまう うしろから近寄ると
 たしかにクジャクが生まれていた

あるとき 白い雲が女をのせたまま落っこちた

のぞきこむと 雲のような毛が生えていた

翌日 旅に出ると 大女が通せんぼするので切符
 を見せた 女の神は鉄を入れて汽車に乗り込んで
 しまった

空が割れている! と叫ぶと 女が見上げたので
 遠慮なくうしろからつつこんでやった

単つの瓦礫からなる島の
 ヒカリゴケ、アナアオサ
 ふたりで海を渡る
 ひとりで舟を漕ぐ
 指の位置
 鍵穴と死
 骨盤の内側が急所だ

しとと裂けるもの

島の石 人間の舌ざわり

薄い毛の感性、道端の花

*Knob*の垂飾り

裸の女が飛び出す

想像力の分裂症状、大きなおっぱいを着てこぼす

死への叛逆児、スケコマシ

コカ・コーラの壺から、ユリアの口

滅蠟法でできた夜が……

98

蟬や腹でえ鳴くのだが、敵娼の骨を抜き取り賽の目切りに百三十六、それをテーブルに配列すると、柱時計の長針がすさまじい廻転、急速大音声を発してとびかかる。巨大な乳房の年増女、ひりひりする cayenne pepper

99

ひきかたむうすい骨盤、壁をへだてて、女の首筋が燃える、忘れたのよ、大切なこと

糸切り歯の間から、燻製の蛙がのぞく、台所に首飾り、それがら 庖丁

男が feminine だから

凍りついた料理

鍵は、なくしちゃったのよお

一九七〇年十一月二十五日

絵画的な静寂

死刑執行人Gよ、おれは求愛した死者の街、師走の、革命のベル

おれは火種をなくし、裂けた心臓を取り出した

おれは対称形だ、皺の中に軀が埋まる

生者はいない、生者は！

偶然の死、真実の嘘
104

首と涙

月光崩壊！

いかな断片をも忘れ去るべし

涙を流す人の罪深さ
105

君たちのやさしさのびつこの靴音

自由であると信ずるに足る空語のたしかさ

気の遠くなる夜とbandoneon
106

いのちの狂おしさ、むしはまれた夢

ああ ことばは眠る

ことばの輪がいつそうおしくくむ

107
空気をそそのかす

死人形 花人形 水人形

意味ありげなふくみ笑いの

仏壇の錆びた首
永遠の匂い

108

世の中の寝静まるのを待ち

声高らかに、奈落の恋人を呼び出そう

(いつしかほほえまんわれをおもえ こはながる

る じごくはまちをおおいたり)

腰が、魔の手に掴まれたように、砕かれる

109
軀が人形のように透き通り

心臓に緑色の杭を打ち込むもの

汝、ああ、この疲れ！

110
匹如身の間男の死に似せて

白い手袋を叩きつける

尊属を殺せ！

銃器を装備して

墜ち空、曲がれ！

眠れよ太古、やんぬるかな

へ蔭に日向に声かけて

III

叩き起こして死するなり

おれはおれの死を叩き売り

眼を濼う

死水で雪ぎ、ひたすら黙す

誰も見ていないから呑気なのだ

ホトドコロ

魂のもつ腐臭、虫の涌いた布

風のままの生涯 その音色

ああ おれの手は全季節の果物だ

剥がれた肉はひからびて

男とも女ともつかぬ白骨

III2

庭掃除。水の流れる暗黒。ふたたび、夢は時間じ

やない。冷蔵庫、牛乳の中で猫を飼う。ミヨウミ

ヨウチヨウ、saffron、オニユリ、gladiolus、つ

つじ、バラ、鏡草……。土をいらう、じよろの水、

葉尖からぼたりと落ちる雫かな。人生の empty。

肥料にせんと小便をひっかけるほど愛す。

ゆらゆらと影の燃ゆ。睡魔の登音……。開放され
たガス栓。ストーブの焰。火災報知機。ひきしほ
る喉、ただれた肌、血まみれの、青い瞳、spectrum、
雪の瞬間の結晶。やさしい爆発。せつない、せつ
ない、gardenの、感傷的な、衝撃。

火をさます鏡、永遠の持続、他人の世界。タレイ
アの器、地獄思想者よ。白骨化したその貌、信頼
と対話、夢の現実。闇をうるおす garden。……無
意味と傲岸さの、がらくた。

自殺実験。闇の中でしかあらわれぬ garden。握り
の象牙、ナマコ。陶酔。共に死のうという。優雅。
不潔さ。観念的フリーズ。生活という死の行為、
死という生活の行為。(闇やいうたかて、けつた
くそわる人間の吹き溜りやろ)という越境。

tape recorder i 感電。全世界の金属の監視。

真紅の花びらのはだら。ポリバケツの液体上の、
浮游性の微粒のゴミ……。黒猫の溺死。

(滅々たる風のように君よあれ 苔類むす地下に

我の待つ 錆びた庖丁。魚の内臓。手首。利き腕の右。鏡の中の、他人の左手。唯一の武器。金属のネットワーク。電話が鳴らぬか。けれど、*garden* はほど近き……。

113 *cinnamon*の喉ほとけ 草色の貌 哀しみの恋 物質的肉体的特性 撃鉄 ジョウウよ! 狂おし (○慾部位) 血族の血 鬼姑神 赤子の首と生えかけの齒

五色の石と天使 *天涯 *黄金の鞭 *羊を奉納する *皿 *召使い

グルシアの蝸壺 x 透明球 || (神 x 部位)

○ 三つの軸 ○ 等質の ○ 美少女の裸体が埋められる ○ 薔薇の匂い ○ 恋 ○ 白濁 ○ 存在の白い根 ○ モーリ ユー ○ 真紅の唇 ○ 閉じよ ○ 回転球 ○ 褐色の穴 ○

いっそ、塞いでしまえ!

plastic arts + 移植 + セラチン + 黄金の臓器 || (ぼろ) || 宇宙の核 + 神の臓器 + ひび割れる回転体

114 鏡の溪谷 (*prism*の内容物) 鏡の平原
の山腹 乱反射 融合反応
の頂の 悩み
の点 凹 || …… あらゆる相似形
のどこもかしこも
の集落 愛による処刑

第一断面 反 へ光
第二断面 反 [反 へ光]

115 永遠に鳴りつづく楽器
忘れかけた革命
物質を貫く
の世界

白い腕がいちだんと強く、腰を抱く
蒸気のベッドで
ふたりの少女が愛するものは
内臓なり

116
ありふれた恋にはせじと
かわいた舌で口ずさむ
流るるは
灰色の脚のさすらいびと
空無なことば

117
老ゆるものの醜い肉体、ふるき世界
瘦せほそるいのち、はかないいのち
それゆえに
老ゆるもののごとくを許さざるべし

118
老ゆるものはその生涯で、あらゆるものを畏れて
いたが、畏れの対象になど出遇ったことがない
皺のひとつひとつが奇妙に交錯し、くろずんだ齒

茎と静かな刻 崩れゆくものの肉体は蘇ることな
く、ふたたび……

119
汽水よ 赤褐色の海藻がからまる 青く光る小魚
の群が岩場で餌を 泡立つ波間をすりぬけて 銀
色の月のささやき 水底に沈んだ幾億の骨のあり
か

120
獣たちよ、海をみたすものよ、崖の切尖
湖から森へ 街を渡り さらに山脈を越え、しぶ
く海、遠き祖先の、哀号！

121
紫色の肌に白い斑点をもつ貝が、夕焼けに染まっ
た海の中を流れていく 渦がそれら小さな生命を
織り込んで、深い深い地球の底においていく

122
海猫の飛び交う崖よ 涸いた血の色をした岩壁よ

狼の吠える崖 幼い人魚の集う崖 やさしい潮の匂いでみたされる岩肌 漁師たちの出発を見守る絶壁 おお、それらの高みが、刻に啖われる幾億の生命を、なんと無表情に見ていたことか

123 荒涼！ 荒涼たる海よ

おお、革命の蘇生を願うなかれ
砕かれしころのままに息絶えろ

124

灰色の砂を眺めていた少女が、老人の話に肩をひそめる 蟹が砂を噛むのはかたい甲羅を破れぬという絶望を持っているからだ 少女は美しい背をひるがえす 思い出を哀しそうに、あるいは楽しんで、そうに語る人種に呪いあれ

125

獅子のように咆哮を放ちながら泣いている少年 薄暗い地下道を行き交う人々が、少年を避けて小走りに通り抜けていく 長髪をふり乱し、顔中を涙で濡らしながら、少年は堰止められぬ嗚咽とと

もに叫んでいた「いのちが血まみれになっているんだ」小脇に抱えていた紙きれを天井高く放り投げて、少年は排水口のように嫌な匂いのする地下道を駆け出した

126

一九六九年十一月 冷たい部屋の眠り
さめざめと泣いていた少女は
女に変身すると
すぐに心を整理した

127

少年よ、君は
部屋の隅で小さくなって暮らす
蠟燭のゆらめきが、君の夜をおびやかす

肉体は訓練を重ね
素粒子ほどに収縮し
地球ほどに膨張しなければならない
そのためには
まず肉体だけで空を翔ぶこと
少年よ、君は

蒼白な寒さの中で
ふと 宇宙が起きているのだと考える

128

季節はギロチン
精神が粉々に飛ぶ
ラッキョウのように
死に接吻し
青い静脈、熱い息
洞窟の奥でうずくまるもの
銀色の砂
時代ののっぺらぼう

129
この皮袋を通じて
線路上で爆発し
橋桁の滴となる

130

冬になると人死に出る。そんなことを思い出し
ていた。「やっぱり不謹慎だよな」呟いてみてけ
っさりした。擦り寄ってくる女の形は曖昧だ。白

粉と香水の入り混った匂いが鼻につく。「君はず
いぶん厚化粧なんだね」言ってから、酷いことを
言うと思っている。ふてくされたふりをする女の
顔に卑屈な色が泛びかけたが、すぐに表情の底に
沈み込み、蔽い隠される。「ふふ、嫌な人ね。そ
の手になんか乗らないわ」

131

門札の夜叉が
西洋風の笑みを洩らす

132

旅館の長い廊下。途中、壁の漆喰を噛みしめ、突
き当たりの仕事場に。竈の燈影だけが妖しく揺れ、
何のための部屋か定かではない。片隅に岩塩のこ
びりついた三足の陶器。室内で作業する褐色の肌
の男たちは、その彩釉技術に目もくれぬ。古い日
記、猟奇の眼、革表紙の書物、耽溺。濡れた紐で
くくられた輪、書物の角に貼られた刃物、毒。注
意を与えても苦しそうに首を振るばかり。根太を
しっかり握られているに違いない。ようやく女主人
が現われ、宿帖に記名を迫る。

133
 夜を記憶しない日々。煙と湿度。鳥に变身する。
 強い翼で都市に風を。塩、ガスの噴出音。青虫。
 灰に埋まる裸体。枝折戸が開閉し、数億の首なし
 の餓鬼を生む。

134
 鉛の焦げる古都。匂い。肥大した河。褐色の指、
 腕、緑の胴体が。長雨の中で燃える橋。烟る流沙。
 爪、髪、灰色の骨を埋める。沈む。とじめ。冬が
 閉じる。全季節が塞がり、自然が消滅し、宇宙が
 青黒い火球になって燃えつきても、失われぬもの。
 市場。積み上げられた、赤ん坊の死体。甘い匂い。
 裸の女の眠り。

135
 ガラス張りの部屋で。世界の空気と疲労、冷酷と
 美貌と。軀にそがれる時間、蘇ることのない。
 繋留、未来。第一突堤から、第八突堤、伸びる、
 伸びる、赤い影、山脈、海へ。幾百年、幾千年の
 思い。失われたもの。かかわらぬもの。

緑字箋 バックナンバー御案内



1

郎 幹 山 芝
 裕 一 隆 明 石 金
 一 隆 永 富 小 岡
 薫 志 鷹 井 岩
 志 彰 田 紙

夫 彦 康 入
 裕 隆 田 岡
 薫 明 岡 小
 郎 哲 原 岩 井
 一 隆 永 富
 彦 敦 油 田
 美 俊 神 谷
 彰 田 紙

2



郎 幹 山 芝
 一 隆 明 石 金
 二 隆 永 富 小 岡
 郎 退 天 沢
 齊 彦 渡 岩
 彰 田 紙

3

定価 各1500円／郵便振替 東京1-40157 直江屋

*品切れの場合は御容赦下さい

毀れゆくものの形

二重窓になっていたのだが、それでも外側のガラス戸には結露が凍みつき、奇妙な模様が織られていた。その模様を見るたび、少年は、外気の折々の温度の違いによって、模様を作る葉の形がさまざまに変化するのではないかと思った。アラベスクを紡ぎ出す葉肉の厚さが異なるばかりでなく、気温の質の違いが広葉樹の葉と針葉樹の葉との相違を生じさせるのではないかとも考えていた。けれども、大人の前で「寒さが酷いと、松の葉のように尖るんだね」と言ったときに妙な顔をされたことを思い出し、嫌な気がした。

少年は建て付けの悪い内側のガラス戸を音たてて引き開けてから、その棘々しい葉叢に指を押しあててみた。ひんやりした心地よい感触が訪れたが、それも束の間、白い指にきりきりと劈くような痛みが貫いてきた。その痛みが痺れとなり針のように硬く尖ってくると、ふいに指とガラスとの間で硬さが溶け、痛みを柔かく包み込むように、濡れたガラスの表面が指先にじかに感じられた。そして、冷氣からもたらされる痛みは呆気なく遠のいてしまった。

少年は窓ガラスに貼りついて指に力を罩め、霜でできた膜に円を描こうとした。その膜が指の動きに庄されて水になり、徐々に氷の模様を侵してゆくのが、指の先でよく分かった。けれどその円の大きさも、直径で五センチほどになると、広がりをとどめてしまった。

窓の外ではしきりに粉雪が降っていた。このような夜は寒さがことの

紙田 彰

ほか敵しく、冷氣が人々の足下から重い衝撃を伴って心臓に辿り着くと言われている。風に吹かれて跡切れることのない雪は、少年のいる部屋の明かりを曖昧な輪郭で受けとめて、ちょうどその部分が闇から抉られ、白い紡錘形が宙吊りにされているように見えた。吹き下ろす風のためにしばしば渦を巻きながら、光の投影された雪の空間は、別世界への入口を思わせるようなあやふやな輝きを帯びていた。

少年は自分で窓に穿った小さな穴からその光景を見つめていた。彼は、片目をその穴にあてがいがい、望遠鏡を覗く恰好で雪の吹き乱れるさまを眺めているのではなかった。氷の浮彫細工にできた滴のような穴から身を離し、その位置から両目の焦点を結んでいた。

腺病質で、普段から青白い顔をしている少年の頬に、珍しく血の色が浮かび始めていた。青みのかかった眸が次第に細められ、瞼の奥の白い光が強まっていくように思われた。ガラスの窓に開いた小さな穴の向こうに、何か気をとられるようなものを発見でもしたのだろうか。彫りの深い少年の容貌がわずかに歪み、この年頃の子供に似つかわしくもない笑みが、その歪みの中からこぼれるように見えた。細い唇の間から赤い舌が覗いた。頬の色がいっそう紅潮して見えた。握りしめた拳の細い指がふるえるように開かれ、爪の先から反り返った。細められていた目が大きく瞳かれ、眼球が飛び出さんばかりに膨れ上がり、白目の部分が真赤に充血していた。得体の知れない呻きが、そのとき少年の喉許を奔ったようであった。

立ち竦む少年は、隙間なく降り続く厚い雪の壁の、その向こうに広がる漆黒の闇の底から、禁断の赤い火がゆらゆら立ち昇るのを見ていた。

雪の彼方に埋もれている一点の炎、夜の底で駭りを帯びて燃え盛ろうとする血の色をした火焰を、うっとりとして見つめていたのだ。

大晦日の激しい雪降りの晩に、鶉町を大火が見舞った。選炭場の電気系統の事故が原因でガス爆発が起こり、その火が積み出しを待つ貯蔵炭の小山を次々と襲い、一夜にして一帯の炭鉱関係の工場群が灰燼に帰したのであった。燃え上がった炎は吹雪の中を渦を巻いて中空に立ち昇り、雪を呑み込み、町の空全体を赤々と染め上げた。降りやまぬ雪が、横殴りに吹きすさぶ風が、その勢いになお力を与えているようにも思われた。襟々たる煙はその色を闇に削がれがちだったが、それでも中天の高みに至ると、厚い雲を摩するようになんげと伸び上がり、夜より暗い色になって空を蔽った。凄じい炎と舞い狂う火の粉に照らし出された雪と冬空は毒々しいまでに紅蓮に染まり、その中をおびただしいサイレンの音が駆け抜けていった。

数多くの怪我人が出たため、炭礦病院には収容しきれず、鶉町の市街地にある幾つかの個人病院にも怪我人が運び込まれた。それぞれの病院には患者の家族や同僚も詰めかけたが、除夜の鐘の鳴り終わる頃には、ほとんどの人が病院を引き揚げていった。だが、家路を急ぐ人々の顔には依然として北の空を染める炎の色が蔽いかぶさり、どの表情にも始まったばかりの新しい未来への不安を表わす陰翳が映し出されていた。

矢継医院でも、ようやく表玄関に鍵が掛けられた。油煙や石炭の粉に汚れた雪が、押しかけた人々の着衣や靴から溶け出し、泥濘のようになっていた廊下も、もうすっかり拭き清められていた。看護婦が二人居残ることになり、二階の詰所で仮眠をとっている。また、入院患者のために設けられた娯楽室では、安否の気遣われる重傷者の家族が毛布にくるまって蹲っていた。

先ほどまで騒然としていた一階は、人の気配も失せて、静まり返っている。廊下の奥にある手術室の術中を示す赤ランプは消え、ただ一つ、

裏口にある非常口を表わす緑の表示灯だけがぼんやり点っていた。しかし、手術室の両開きの重いドアは開け放たれたままだった。死者を閉じ込めてしまわぬようにとの配慮でもなされていたのだろうか。手術室の明り採りの高窓から、建物の外にある水銀燈の光が、降り続く雪の乱反射がもたらす妖しい効果によって、いっそう青味を帯びて入り込んでいた。手術台の上で横たわる死体が、その光の中にあつた。腹部を白い布で蔽われただけの骸は、凍りつくような寒さの中で丸裸だった。アルコールで全身を拭われ、火傷による劇しい爛れも、熱を失ったせいか肌に吸い込まれ、動かぬ体は滑らかな鉱物でできているように見えた。数十年、筋肉労働だけに打ち込んでいたのだろう、老人の年には不釣合な逞しい裸体だった。いま、老人の死んだ肉体は、臉を閉じられて、蒼白な光と静謐さに支配された闇の中にぼっかりと浮かんでいる。そしていつの間にか、手術室の両開きにされたドアの傍に、青白い顔をした少年が立っていた。

矢継早彦——矢継医院の跡取り息子である。彼は、病院の二階にある勉強部屋から、院長宅の側の階段を廻って、誰一人としていないこの一階へ降りて来ていた。そして、ここで、生まれて初めて死体を見た。

その死体は白蠟のような蒼白い艶を帯びて横たわっていた。手術室の中は外燈の光がわずかに注ぐだけの暗闇だった。そこに、まるで造りもののような、感傷など寄せつけぬ明瞭な死の形があった。綺麗だな、と思っただけで、ふとあたりを見廻した。けれども、ここにいるのは確かに早彦だけだった。

早彦は足音をたてずに死体のそばに進み寄り、胴体を蔽っていた布を恐る恐るつまんだ。それは、死の秘密を嗅ぎとろうとすることなのか、あるいは得体のしれないものに唆かされてでもいるためなのか、早彦自身にも判断がつかなかった。

火傷の痕がへこんだといっても、近くで見ると酷く醜悪で陰惨なものだった。そればかりか、蛋白質の焼ける異様な臭いさえ残されていた。

腹部の方は大した傷も見当たらず滑らかだったが、右の脇腹と太股の肉が露出していた。奇妙なことに、胡麻塩の陰毛の中から、鬱血して膨んだままの性器が垂れ下がっていた。白髪毘じりの頭部の毛の半分は脱け落ち、地肌が焼け爛れ、顔の皮膚も引き攀れていた。それでも、瞑目した老人の表情は穏やかなものに見えた。

早彦は手を伸ばして、老人の閉じられた臉に触れてみた。それは酷寒の冬そのものを一点に集めたかのような、驚くべき冷たさだった。あわてて手を離すと、死体の臉がずり上がった。瞳孔を開いたまま、死体の眼珠が早彦を睨み据えた。

そのとき、骨の鳴る音がした。鈍いけれどもよく響く音だった。そして同時に、死体の腕がバネ仕掛のように折れ曲がった。

早彦は背筋を氷の牙によって噛みつかれたような悪寒を感じ、思わず後退った。そのまま手術室を飛び出すと、大きな足音をたてさせながら真暗な廊下を駆けていった。

手術室のドアの蔭に、矢継院長が立っていた。息子の走り去ったのを確かめると、手術室の中に入り、死後硬直の始まった老人の腕を、ばきんばきんという音をさせながら凄じい力で折り曲げ、胸元で合掌させるのだった。

二

ズリ山の鋸歯状の山容によって扶られた七月の空が、その青さをいよいよ深めようという頃に、早彦はそいつを見つけた。その日、鶉町の二つの中学の統合が正式に決まり、それに反対する教職員のストライキが決行されたため、生徒は学校から午前中に解放されていた。町の人口が

減っていることは知っていたが、早彦にはそれが取り返しつかぬことだという実感はなかった。それでも、いつもは学校にいて見ることでしかない時刻の、活気の乏しくなった町の姿を知るいい機会だと思って、一度帰宅してから外へ出てみた。絶頂の時期を過ぎて急速に没落していく炭鉱町は、そのメインストリートでさえ、近頃、とみに走る車の数が少なくなっていた。けれども、灰色の舗装道路は燦々と降り注ぐ太陽の光を存分に吸い込み、きらきら輝く光の粒を撒き散らしていた。坂に上がったあたりでは、透明な水のような蜃気楼が浮かんで消えていた。早彦は、その光の交錯する道に気をそわられて、ぼんやり眺めながら歩いた。気の遠くなるような、午後の緩慢な時の流れが身を浸していた。市街地のこの森閑さは無窮のもののようにも感じられた。

そいつは隣町行きのバスを、停留所の廂の下で待っていた。そいつは褐色の薄汚れた作業着を着て、だぶついたズボンに両手を突っ込んでいた。あのとときの恰好とまったく同じだった。——自転車泥棒、早彦は胸の中で叫び声をあげた。しばらくためらった後、早彦はバス停に近づいていった。

じきにバスがやって来た。そいつは早彦に気づいたふうもなく、バスの行先を確かめると、車掌からパンチの入った薄紙でできた切符を受け取り、前の方の座席に坐った。早彦は最後尾の席からそいつを窺うことにした。

市街地の道路を右折して国鉄鶉線の踏切を越えると、両側に石垣を嵌め込んだ切り通しにさしかかり、その先は急峻な坂道だった。前にのめりそうな気がして、早彦は前の座席の背に渡してある手摺を握りしめた。道筋のところどころに小さな谷が走り、その向こうに町営の焼場と屎尿処理場が見えた。緑の深い山並が近づいたり離れたりしていた。長い坂を降りきると、蜿蜒とした道が続く。それにつれて、山肌が迫りくるような景色は後退し、山間を縫って箱庭のような田畑が現われる。バスの振動が単調なため、軽い眠気に囚われながら、いったいどこまで行くつ

もりなのだろう、と早彦は思った。

——自転車で遠乗りしての帰りに、早彦は陸上競技場の跡にさしかかった。そこは一昔も前、炭鉱が好景氣を謳歌していた頃に、鉱山会社が山腹を切り拓いて造ったもので、いまは名も知れぬ雑草が生い繁り、手を加えることもなく打ち棄てられていた。その傍を通る砂利道も、ほとんど人の行き交うことがなかった。夕陽が沈もうとしていたので、早彦はペダルを踏む足に力を入れた。家々の林立する煙突からゆらめき流れる夕餉の煙が、山道の高みから一望すると、細長くつづく町並を霞のように包んでいた。

そのとき、あたりに響する大きな罵声と毆打する音が涌き上がった。思わずブレーキをかけると、叢の奥から白い開襟シャツの若い男が飛び出してきた。しかし男は、早彦に一瞥をくれることもなく、「おれたちは出していく。そんなに先のことじゃない。こんな煤けたところは沢山だ。いいか、これはあいつから言い出したことだ。おまえは、一生ここで穴でも掘っているんだな」と吐き捨てるように言うと、後も振り返らずにどンドン坂道を下って行った。早彦は自転車を道端に停めてしばらく様子を探っていたが、叢の向こうからは誰も出て来る気配がしない。ただ、啜び泣くようなすかな声がした。早彦は踏みこむと、丈高い雑草を掻き分けて、その奥を覗いてみた。

くたびれた作業着の中年男が、頬に手を当てて蹲っているのが見えた。楕円形をした四百メートルのトラックが草に埋もれているのとは対照的に、中央にある砂場を中心にした窪地がぼっかりと地肌を覗かせていた。そこにくずおれた中年男は、自失したような虚ろな眸で夕焼けを眺めていた。すでに夕陽は山蔭に入り、山頂に漂う雲が縁に赤味を残しているだけで、あとは暮色が濃くなっていた。

深閑とした山の中で、早彦はなおも踟躇んでいた。男の人相がよく分かんなくなっていた。まだ泣いているのかとも思ったが、足を投げ出して

溜息をついているだけのようでもあった。男はそのうちに奇妙なことを始めた。ズボンのジッパーを下ろすと、股間から黒々としたものを取り出すのだ。そして、低い唸り声で、ばかやろう、ばかやろう、と何度も繰り返した。早彦はその黒いものが膨れ上がっていくのを見ていた。男は勃起したものを握り、忙しく手を動かし、息を弾ませていた。月が腐触したような色を帯び始め、夜風に山中の草や梢が擦り音を洩らしていた。雲の間には一つ二つ星が瞬きだした。初夏に入っているというのに、北国の風はまだ冷たい。早彦は身震いした。山々の稜線の際に残された灰白い光が全く消え失せると、妙に濃んだ色の月が、あたりに醜ろな光を投げかけていった。

男の股間から、その不吉な月めがけて、夜目にも鮮やかな、白いものが迸った。卒塔婆の間をうろつく鬼火のように、肉体から脱け出すことのできる生命の原型のようなもの、早彦の脳裡をそんな考えが掠めた。

その瞬間、「誰だ!」という鋭い声が放たれた。男が茂みの向こうで仁王立ちになって睨みつけていた。早彦は飛び上がった。男はズボンに性器を押し込みながら、駈け寄ってきた。その顔は月の妖しい光に照らし出され、涙の痕跡を貼りつけたまま男の性器のように赤黒く腫れ上がり、吊り上がった目には、早彦の心臓をつかみとらなばかりの狂暴さが浮かび上がっていた。早彦は山の斜面を転がるように滑り降りた。誰も追いかけてこないとき、早彦は炭塵の流れる黒い川の畔にいた。息をついて山腹を仰ぎ見ると、人魂のような光が浮かんでいた。そして光が首を振るようにゆらめくと、次第に速度を増して山腹の道に沿って流れていった。男が早彦の自転車を持ち去ったのだ。あの光は自転車のランプに違いなかった。

早彦は人けのない木橋を渡りながら、ぬめりを帯びて流れる黒い川面に、自分の細い影が月明りのために長く伸び、頼りなげにゆらめいているのを見つめていた。

前方のどこの窓からか虹が紛れ込み、羽音を立てて飛んで来た。バスの中に吹き込む風のため後方に追いやられた虹は、旋回すると早彦に纏いつき始めた。嫌だなと思って手で振り払うと、虹は本格的に早彦を襲いだした。痛っと思っただけには、もう額に虹の雫を頂戴していた。早彦は額を押えながら心細くなってきた。隣町へ入っても、いつはバスから降りる気配を見せなかった。ポケットの中を探ってみたが、行先によっては帰りのバス代に欠けるかも知れない。途中で諦めることになるのかなとも思った。

そいつを後ろの席から観察していると、何か落ち着きがなく、苛々しているように思われた。座席の手摺を煤けた黒い手で握りしめ、いっかな手を離そうとしない。早彦のところからも、手首に浮き出た静脈が、手摺を握り直すたび、痙攣でも起こすように弾けるのが分かった。そういえば、ときどき見える横顔は蒼褪め、その表情も硬ばっていた。

そいつがようやく腰を上げたのは、隣町の中心地区を過ぎて、町の奥にある炭住地帯にさしかかっただけだった。早彦は、立ち上がりかけたそいつの作業着の胸のあたりに気をとられた。その膨んだ生地、動きに不審を抱いたのだ。ジャンパーの粗い布の動きに背くかのような不自然な皺が現われ、そこだけ切れ切れになった冷たい硬質の線分がとどまり、布地の奥に重たい異物が潜んでいるような気がした。

そいつはバスを降りると、時計を見ながらしばらく立ち停まっていた。早彦はそいつの脇を通り抜け、近くの建物の蔭に廻り込み、信用金庫の名を記した看板の後ろからそいつを窺っていた。そいつは道路を渡り、寂しく静まり返った昼下がりの路地を木造の集会所めざしてゆっくり歩いていた。継ぎ目から湯気を吹き出している太いスチームパイプが、何本も空中に張り渡されている。集会所は炭住街につきものの娯楽施設で、映画の上映や芝居小舎としても利用されていた。安保闘争のときには、その拠点ともなった。モルタル塗りの建物までの道のりは、早彦の立っている場所からすべて見通すことができた。

作業着の男は、集会所の傍の掲示板のあたりで立ち停まった。合理化反対と大書されたビラが風にはためいていた。背中を丸めた男がゆっくと振り返った。その目が早彦を見つめた。早彦はそう感じて、看板の蔭で身をふるわせた。けれども、そいつは早彦を睨みつけているのではなかった。そいつは、早彦の隠れている建物を、この町にただ一つある信用金庫を見ているのだった。数秒の後、それに気づいた早彦は、窓から建物の中を覗いてみた。数人の職員と客がいるだけで閑散としていたが、人の動きが停滞しているというわけではなかった。早彦の目が、その中の一人の男に惹きつけられた。

早彦があわてて振り向くと、掲示板の前に立っていた男が背を向けて歩き始めていた。炭住街の中心から外れた粗末な家並のある通りに入り、その裏手に流れる川の方へと下りていった。それにしても、距離にして五百メートルほどのことに過ぎない。川には石炭を選別した後の廃水が流れていて、水は黒く濁んでいた。川岸には泥炭の堆積ができ、濡れて黒光りする表面が太陽に晒されていた。涸いて粉炭になったものを貯蔵する掘立小舎もあった。

早彦は川辺には下りずに、隈笹の繁みに入ってそいつの様子を眺めた。そいつは掘立小舎に入り込むと、しばらくしてから出て来た。それから泥のついた手を黒い川の水で洗うと、胸ポケットから手拭いを出して、それで拭いた。そいつが手拭いを出すときに、あの硬い膨みが消えているのを、早彦は見逃さなかった。

男が表通りの方へ姿を消してしまおうと、早彦は入口に垂れ下がっている蓆を引き上げて小舎の中へ入った。案の定、小舎の隅には何かを埋めた形跡があった。湿り気を帯びた粉炭の小山の一角を指で掘り起こしてみると、ぼろ布にくるまったものが現われた。取り上げると、ずしりとした量感が伝わってきた。早彦は、自分の妄想が目の前に形をとって現われたのを知った。薄暗がりの中に、鈍い光沢を湛えた拳銃があった。旧式だけど綺麗な形だ、この繊細な銃身、引金の微妙な曲線、美しいな、

早彦はそう思う。死と一直線に結びつく崇高な器械——。これが安全装置、そう呟いて、低い金属音をたてさせた。早彦の緊張した心臓の鼓動を慰撫するような優しい音——。早彦を掌で何度も銃身を擦っていた。冷たい感触が伝わり、脳髓を痺れさすような快感を覚えた。

その拳銃は早彦をすっかり魅了していた。そして、それにどまらず、殺意さえ誘き出し始めた。席が風に揺れてめくれ、そこから入り込む光が拳銃を舐めるたびに、早彦は自分が殺人事件の犯人になっている姿を想像した。信用金庫が閉まる前にあの男は必ずここに戻ってくる、そのとき銃口をこうやって突きつけたら——、そう考えるのが愉快になってきた。弾丸は入っているのだろうかと思ひ、弾倉を開けてみると、確かに六発全部が装填されていた。リボルバーを元に戻すと、カシャッと小気味のいい音が響いた。けれどもそのとたん、ぎくりとして、早彦は小舎の中を見廻していた。狭い小舎の中に、あの男が潜んでいるような気がしたからだ。腋下を冷たい汗が伝った。小さな粉炭の山が一つあるだけで、誰もいるはずがなかった。早彦は、すぐにもあの男が戻ってくるような恐怖に囚われていた。

早彦のしたことは、濁いた粉炭をほんの一掬い、銃口へ注ぎ込むことだった。そのとき、天井を向いた照星がきらりと光った。早彦の眸にその光が吸い込まれた。早彦はぼろ布を取り上げ、銃身を先の方から丁寧に磨いた。どんよりした光沢に包まれた拳銃を布でぐるむと、元通り小舎の片隅に埋め直した。

信用金庫と隣の建物との間に、ようやく人が通れるくらいの隙間があって、そこに入り込んで背伸びすると、早彦の背丈でも、鍵の掛けられた窓から中の様子がよく見えた。ガラスの向こうの物音は聞こえないが、早彦にはなおのこと、人形芝居を見るような、往来とは遮断された異世界が箱に入って滞っているような気がした。正面の壁の柱時計がもうじき午後三時を示そうとしており、客の姿はなく、何人かの職員が帳簿類

の整理をしているだけだった。

開襟シャツを着た若い職員がカウンターの下の潜り戸を抜けて出て来た。その男は、あのとき、陸上競技場の叢から出て来て、捨科白を残して立ち去った男だった。早彦は、この男が狙われているのだと考えていた。もう箱の中に手を入れることはできない、ここでこうして見続けたら、早彦はこれから起こるはずのことに心を躍らせた。

その若い職員が鍵束を左右に揺すりながら正面玄関に向かおうとしたとき、ふいに扉が開き、客が一人飛び込んで来た。職員がその客に何か言いかけて顔を上げたとき、思わず怯んでいる様子が伝わってきた。それから、入口で二言三言、言葉が交わされたようだ。早彦は、その客があの自転車泥棒であることに満足していた。

若い職員が口を開いて何か叫んでいるように見えた。他の職員が玄関の方を一齐に注目した。それと同時に、若い職員が突き飛ばされようめいた。作業着を着たその右手に、ぬめりを帯びた拳銃が握られていた。

そいつは大金庫の扉の前に坐っている老人に拳銃を向けて、しきりに何か喋っていた。職員たちは目を睨いたまま総立ちになり、両手を高々と掲げていた。彼らの硬ばった眸を見ていると、涙腺が麻痺でもしているように思われた。突き飛ばされた若い職員はじりじり後退り、カウンターに貼りついていった。

しみのついた風呂敷の四隅が結ばれるのに、それほど時間はかからなかった。茜色の陽光に晒されているにもかかわらず、風呂敷包みを抱えた男の顔が妙に白くなり、平板な造作がよけいに平面的になり、まるでゆらめく蜻蛉のように見えた。

柱時計が時報の鐘を打っているのだろうか、信用金庫内にはりつめていた緊張がわずかに弛み、全員の注意が早彦には聞こえぬ音の方に移り、耳をそばだてているような気がした。ほんの一瞬、緩慢な時が流れたように感じた。

拳銃を握りしめたその目の目が憎しみの光を宿らせて炯々とした。それに感応するかのように、銃口が鈍色の光を軌跡に残して、カウンタに貼りついている若い男に向けられていた。

凍りついた若い男の唇の端から泡が洩れているのが見えた。彼がすっかり動揺しているのは、膝がうちふるえ、くずおれそうに痙攣していることから察せられた。そして、ついには両掌を合わせて哀願の仕種さえしていた。

引金の指がゆっくりと絞られていった。向こうから爆発音だけが甲高く轟き、早彦の鼻先の厚い窓ガラスがキーンという音をたてて激しく顫動していた。ゆっくりふるえるガラスを通して、空中に絵具を塗りつけたように鮮血が漂い、その血の煙にからみつかれながら、指や腕、顔面の付属物がまるで塵埃のようにまぜこぜになって浮游した状態で、一切が無限の静止をしつづけているように見えた。その中に取り残された胴体が、硬直した右足の踵を軸に独楽のようにくるくる回転し、それは夕陽の赤い色彩に染まって飛び立つ鳥類の姿を想像させた。冬の深夜に見た、手術台上で凍りついたあの白蠟のような死体よりも、いっそう美しい光景が展開されている、早彦は目を凝らしていた。夕刻の光を浴びているためか、それともガラスの向こうに迸る血の飛沫のためか、早彦の顔が紅蓮の炎に包まれていた。

拳銃が暴発し、脆くも炸裂して、自転車泥棒の右手と顔の半分が吹き飛んだのだ。倒れ込んだ男は爬虫類のように床の上でのたうっていた。けれどもそれも寸秒のことで、打ち寄せる波のように溢れ出た暗い血の海の中ですぐに動きを止めてしまった。

二一

夏休みの始まった日の朝、早彦は食事を済ませると二階へ上がり、窓を開け放した勉強部屋に閉じ込もっていた。外は曇一つない青空だった。その透明な空を背景にして、強い風の一吹きでもあれば瓦解してしままいそうな、みるからに華奢な竹細工の虫籠が浮かんでいた。

早彦は窓に吊られたその籠の中を覗き込み、ナイフで鋭く尖らせた十二本の色鉛筆をめまぐるしく取り替えながら、細かい一本一本の線や、微妙に色合いの異なるそれぞれの部分を白い画用紙に念入りに描いていた。

陽の光に灼けた籠の中には、病院裏の野菜畑に植わる大根の葉から採取した青虫が、黄色いしみのできた葉と一緒に入れられていた。初めのうちは大根の葉や雑草のように棘々しく青味を帯びてしまった芹などを摘んできて虫の餌に与えていたが、揚羽蝶の幼虫はすぐに蛹化し、野菜屑は虫喰いの跡を残したまま緑色から次第にひからびた色を呈して籠の底にくずおれ、スケッチの数が十枚を越えようと、いびつな形状をした蛹が虫籠の天井にぶら下がりと、濃い褐色の肌を晒していた。その蛹がこのところ一段と膨みを増してきていた。

早彦は最初の頃、青虫の這い回る姿が気味悪く思われ、部屋の中に置くことをためらい、窓の外の下に吊るしていたのだが、しばらくするうち、眠たげに蠢くこの緑色の小さな虫に愛着を抱くようになった。それで窓の内側の棧に釘を打ち、そこから吊ることにしたわけだが、その頃にはもう虫は蛹になっていた。

いってみれば、蛹はミイラだった。早彦は、幼虫が蛹になってしまえば、少なくともその外形に変化が起こると思ってもみなかったのだが、毎朝見つめると、そうでないことが分かってきた。蛹はその内側から衝き上げるような微妙な動きをするたびに、ぶら下がった体の一部分

がどこかしら膨れてきて、それと逆に表面はかさかさきに乾き、艶をもった鉱物のような褐色に変わっていった。

画用紙に描かれていく虫籠の中の世界は、まるで晩秋のような暮色に溢れていた。黄色という色彩は、緑と合わせて使うと軽快で新鮮な生命の潑刺さという印象を与えるが、茶系統の色と一緒にすると、どこか枯れた老齡を思わせる。早彦はそのような色ばかり使ううちに、この蛹は死んでしまっているのではないかと考えていた。籠の中で喰い荒された野菜はすっかり水分を失い、たしかに陰湿な壞疽のような色をした腐敗を経ることなく、生気の脱け殻のようにミイラとなっていくおれていた。夏の日差しが一瞬にして腐敗から救ったのだ。恐らく、そこにはいかなる生命作用もありえないのだろう。そして、永遠に小さな籠の中でぶら下がりとつづけるはずの蛹もまた、強烈な夏の陽光に晒され、ついに崩れ去るのだろう。

早彦は蛹が揺れているのを見ていた。風のせいだろうと思いつながら、描き終えたばかりのスケッチを右側の画用紙の山に重ね、木目の浮き出た机に肘をついて眺めていた。しかし蛹は、籠の天井との接点から揺れているのではなかった。蛹は自分の体の中央の部分を運動の起点にしていた。それは体をくの字に曲げたりするような、唐突でぎこちのない動きだった。蛹は生きていた。そして、その中から恐らく蝶が誕生するだろう。醜く萎れた蛹が膨んできて、その中からどんな蝶がはばたき出るのだろう。早彦は机の右側に積んだスケッチの上に時刻を書き加え、蛹が動き出す、と記した。その文字の色は、これまでこの観察記録のどこにも用いたことのない赤い色だった。

「蝶々が、ほら」

妹の甲高い声が、居眠りしていた早彦を揺り起こした。尖った頭をつたってこぼれた一筋の唾液が机の上を濡らしていた。半ズボンからはみ出た太股に触れる椅子がひんやりと感じられた。早彦がぼんやりと眼を開

けると、傍で五歳になる妹が人差指を突き出していた。その方向を見上げると、虫籠の中に、蛹を破り、くしゃくしゃの羽を引き摺り出そうと苦闘している蝶の姿があった。竹細工の籠が虫の腕のくにに刺激され、小刻みに揺れ動いていた。

「気味悪い」

もう一度、妹の声が出た。振り向くと、妹が色鉛筆を握りしめていた。早彦には、幼い妹がどうしてそんなことを言っているのか分からなかった。何げなく机の上に視線をやると、描き上げたばかりのスケッチが意味のない真赤な線で塗りたくられているのを知った。そして、その線が蛹を崩壊させ、蝶を生み出したかのような錯覚に囚われた。

早彦は理不尽とも思われる激怒に駈られた。その怒りが、肩から腕へ、そして掌へと伝わる明瞭な感覚が走った。それは突風だった。早彦の腕は突風のように旋回し、五歳の少女を殴りつけていた。妹は兄の一撃を受けて、リノリウムの床に這いつくばった。恐怖で呆けたように、つぶらな眸が睨いたまま滞っていた。

そのとき妹は大声で泣き喚くかわりに、憎悪のこもったまなざしで早彦を射撃めた。それは兄妹にはあるまじき、得体の知れない異物に向けられるまなざしだった。早彦はその凍えるような視線をはねのけるようにして、窓に吊られた虫籠を仰いだ。羽化した黄揚羽が、皺だらけの羽を伸ばそうとよるめいていた。早彦は籠を掴むと吊り紐を渾身の力で引き千切り、小脇に抱えたまま部屋を飛び出した。

白い捕虫網と虫籠を持った早彦は、裏山の中腹にさしかかったところに来ると立ち止まり、そこから下界を見下ろした。墨を刷いたような黒い川が水面を燦かせながら流れていた。山道からは、ゆるやかに蛇行する川に沿ってだらだら続く鶉町の、南北に長い姿が見渡せた。積出し炭を満載した貨車が何十輛となく繋がり、それを牽引する機関車が濛々たる煙をたなびかせながら家々の間を動いていた。そのとき、追い縋るか

のような長閑な響きを伴って、正午のサイレンが鳴った。

山の裏側に廻り込むと、そこには石切場の跡があり、傍に湧水でできた小さな沼があった。早彦は、このあたりで銀色の蝶を見かけたという噂を耳にしたことがあった。それが銀色の鱗粉をもつ新種の蝶なのか、ただ光線の加減によってそう見えるだけなのか、その話からは知ることができなかった。

沼の向こうには松林が広がり、下生えには斑々な模様をした限笹が繁っていた。沼の反対側に廻り込もうとしたとき、早彦は畔近くにある松の木蔭で奇妙なものが突き出ているのに気づいた。それは青味がかった、白く細長い穂のようなもので、根元の方が黒ずんだ赤い葉で包まれている。落葉に寄生する茸の一種なのだろうとは思ったが、まるで死人の指のように見えて不気味だった。

その不思議な植物のそばに近寄ろうとしたとき、鬱蒼とした限笹の繁みから湧き出るように舞い上がるものがあった。午後の陽光を受け、銀色の光を湛えた一匹の蝶が、中空で眩く輝いているのを早彦は見た。噂のとおり銀色に燦く蝶は、光に包まれた羽をひらひらさせて沼の上を回り始めた。大型の蝶が頭上近くを掠め、薄い二枚の羽が太陽を遮ったとき、早彦は羽を透かした光が紫色であったような気がした。そして、その蝶が鳥揚羽の仲間ではないかと思った。

早彦を誘いかけるような仕種を見せて何度か旋回を繰り返した蝶は、空中からゆらゆら舞い降りると光を帯びた銀色の羽を静かに畳み、例の奇妙な植物の突起にとまった。それを見定めると、逸る気持を抑え、早彦は一面に生えた雑草を踏み分けながら近づいていった。松の根方からは青臭い匂いが立ち昇っていた。早彦は捕虫網の白い尾をはためかせ、飛び上がろうとする寸前の銀色の蝶めがけて斜めに振り下ろした。笹の葉の何枚かが乾いた音をたてて宙を飛んだ。早彦はあたりに蝶の逃れた形跡がないのを確かめてから、網を水平に振り、長い囊くわをくねらせて草の上に投げ出した。

蜂を伝って郭公の啼き声が響いた。囊の中には、あの奇妙な植物も一緒に囚われていた。早彦は蝶を摘み出してみたが、銀色の蝶は黄色い液を吐き、すでに死んでしまっていた。蝶の死体から指先で鱗粉を削ぎ落とすと、その部分だけが紫色に見えた。早彦は屍と化した蝶を沼の上に放り投げた。くるくると不規則に回転しながら落下した蝶が泥土の混じった水に浮かぶと、銀色の鱗粉が溶け出して鮮紅色の液体になるような気がした。そのとき、泥水の中に細かい泡が生じたかと思うと、水音をたてて飛沫があがった。しばらくして波紋が収まると、沼の上の蝶の姿は跡形もなくかき消えていた。早彦は、その濁った水の奥に、脂っこく光る鱗を見たように思った。

奇妙な植物の方は、あのくすんだ赤い葉がとれていった。その葉を裏返しただけに見ていた早彦は、蝶のように二つに折り畳むと沼の中に放り込んだ。葉は蝶の消えたあたりに浮かんだまま、太陽の光を反射していた。死体の指のような突起の方は、気味が悪くて触る気になれなかった。北国の夏とはいえ、午後も盛りになると、さすがに暑くなってくる。

早彦は裸足になると沼の水に足を突っ込んでみた。べとりとした感触が足を包んだが、その冷たさが幾分気に入って、水を勢いよく蹴り上げると、褐色の泥水が真白な飛沫に変わった。水飛沫が頭上の太陽まで達して落下するとき、空に七色の帯が漂っているように思った。しかし次の瞬間には、頭からずぶ濡れになっていた。早彦は面倒になって、シャツと半ズボンを脱ぎ捨てると、水の中で肩まで漬かり、それから大掻きを開始した。沼は向こう岸まで十五、六メートルほどの距離なので、何なく往復することができる。けれども数メートルも行かないうちに、早彦はあわてて引き返してきた。沼に浮かんだ水草の蔭で、鉛色の光沢を帯びた鮒が腹を上に向けて死んでいるのを見たためだった。早彦は、裸の肌が妙な違和感に包まれているような気がした。まるで、激しい蕁麻疹にでも襲われているみたいだった。脹脛や脇腹をくすぐる得体の知れない生き物が、水の中に無数に潜んでいるのではないかと思った。

急いで沼から這い上がると、草原を狂ったように駆け回った。泥のついた裸に濃緑の汁が沁み込んでいった。雑草の中には、薄い柔毛を生やし、端が剃刀のように鋭い草が混じっている。気がつく、早彦の体のあちこちに軽い切り傷ができ、そこから血が薄く滲み出ている。

松林を外れた傍に小さな畑があった。その一画に、畑の玉蜀黍や豌豆に給水するため、水道管が引かれていた。木の杭に蛇口を括りつけただけの簡素なものだったが、早彦はそこで汚れた体と衣服を洗った。

早彦は捕虫網を放り出してあるところに戻ると、濡れた服を草の上に広げて、松の木の下で寝転がった。青空が、きらきら輝く光のせいで割れてゆくような気がした。何げなく、白い網の中に残されているあの奇怪な植物を取り出してみた。それはひんやりとして冷たかった。肉穂花序のようにぶつぶつしていて、ヤングコーンを繊細にしたように柔かだった。青白いと思っていたのだが、手に取るとほんのり黄みがかっていた。鼻を擦り寄せると甘い匂いがして、早彦は脳の芯がぐるぐる回るような感覚に囚われた。

肌寒さを感じて目を覚ましたとき、空では細かく千切れた夕焼雲が急速に翳りを帯び始めていた。山の中は夜を迎え、深々として物音ひとつ聞こえず、紺色の空に浮かぶ月が次第に色づき始め、いっそう凄寥としてきた。そのとき、林の奥から鋭い悲鳴が迸った。早彦はあわてて飛び起きたが、まだ裸のままなのに気づいた。裸のまま立ち上がり、薄暗闇に吞まれた林の奥にじっと目を凝らした。そこから甲高い叫びが数度涌いたが、早彦の目には何も捉えられなかった。山奥に潜む魔物の一族が騒ぎたてているような気がした。しばらくすると、それは激しい女の泣き声に変わった。

早彦はこのあたりに誰かがいるのだと思った。そう考えているとき、ふっと女の泣き声がかき消された。耳を澄ましてみたが、暗い松林は異変を暗示する静寂だけを残していた。魅入られてもしたような強い好奇心

心に囚われると、早彦は足音を忍ばせ林の中に踏み入った。背を踞めて隈笹の繁みを手探りで掻き分けながら闇の中を進んだ。確かに、その向こうに人の気配がした。かすかだが、苦しげに息つく音が伝わってきた。早彦は静かな動作で、一本の木の蔭に裸体を滑り込ませた。

湿気のある微臭い空気が籠っていた。早彦は林の中をずいぶん奥深くまで侵入していた。ようやく闇に馴れた目に浮かんでは、叢の中で種れて蠢く人影だった。顔ははっきりしないが、男の方が女の方を下にして蔽いかぶさっていた。そして、頻りに首を振る女の口に何かの布きれが押し込まれているように見えた。

西陽の没しきったのが梢の色の変化から窺われた。林の奥は完全な暗闇と化していた。男の低い唸り声が徐々に獣のような咆哮に変わり始めた。笹の葉の擦れ合う音が忙しくなった。そのとき、重なり合った枝の破れ目を縫って冴え冴えとした月の光が射し込んだ。早彦は二人の下半身がすっかり剥き出しにされているのを見た。そして、男の体の位置が変わるたびに、月光に晒されては明瞭に浮かぶ、二人の体毛に包まれた箇所から目を逸らすことができないうでいた。肉体の、あまりに単純で猥雑な仕様に魅了されていた。早彦は自分の性器が脹れ上がってきていることに気づかなかった。

早彦に背を向けている男は、女の細い脚を片手で抱えながら激しく動いていた。青白い月の光がその光景を妖しく映し出し、あたりの闇だけが静謐を湛えていた。光の輪と暗がりの境界で何かが鋭く光った。早彦がその白い光を見定めようとしたとき、月光は松の梢によって遮られ、闇が戻るのと一緒に叢の中の光も失われた。ふさがれた女の口の端から洩れる息が間歇的になり、抑えがたいほど煽情的なものに感じられた。早彦は木蔭から裸体を現わすと、闇に乗じてするする忍び寄り、叢を貫いて地面に突き刺さっているものを引き抜いた。蠟を握りしめたような滑らかな感触がして、掌にすっぽり収まった。

月が再び顔を見せたのはそのときだった。月光を浴びて立ちつくす早

彦を、押し拉げられた女が驚愕の目で捉えた。初めて出会ったその目は助けを求めるどころか、次の瞬間、みるみる恐怖の色に染められていった。女の視線は早彦の腰に釘づけにされ、そこには今にも破裂しそうなほどおえぎった性器があった。早彦は自分の股間を見て動揺した。頭の中を疾る熱いものが何によるものかは分からなかった。しかし、自分が何をしようとしているのかを、突然に霧のような曖昧さで知った。

早彦は両手で登山ナイフを握りしめ、頭上に振りかざすと、青い光の中に裸体を躍らせ、男の背中に深々と突き刺していた。女の白い下肢が激しくわななき、男の腰に絡められた。男は凄じい叫び声をあげると、身を跳き、女の体から離れようと試みた。けれど、離れることは不可能だった。その男めがけて、刃物が何度も突きたてられた。後ろを振り返った男の顔に、早彦の体が放った白い激がおびただしく注がれ、男は濡れた顔を背けて再び女の体に重なる、そのまま絶命した。後ろ手に縛られていた女は、その間中、全身を痙攣させ、鼻孔から泡を吹き、身をのけぞらしていたが、早彦が気づいたときには、既に苦悶の表情を浮かべて窒息していた。

早彦は男の死体を押しのと、女の口に詰めこまれていた下着を引き摺り出し、それで血に塗れた女の細い顔とナイフの象牙の柄を拭い、かすかな笑いを洩らすように唇を歪ませた。充血した眸が妖しく炯々した。早彦は女のまだ生温かい死体に蔽いかぶさると、依然として勢いを衰えさせない自分の性器を握った。月光の加減でそう見えるのか、叢に映る影が一角獣のように不気味だった。

林から出て来た早彦は、捕虫網の中に戻しておいた奇怪な植物の突起を沼の上に放り投げた。それから、血だらけの体を水に沈め、口笛を低く洩らしながら、その突起の浮かんでいる方へと進んでいった。夜空ではいつのまにか月が赤く爛れ、水の面を同じ色合いに染め始めていた。沼に棲む蛙の群が不吉な鳴き声を発した。

四

空気中に、油の粒子が隙間なく漂っていた。眩く照りつける太陽がそんな妄想をもたらす時刻だった。鶉町は山間にあるせいで、夏のうちの何日かが北国とは思えぬほど暑くなる。寂れかけた炭鉱町から離れられないでいる煤けた顔の人々は、まるでその時刻に詰め込まれた鱒の死骸のように、ぎらぎらした暑さにうだっていた。

蟻涙のように熱を帯びて滴る火が陽炎をつくりだし、その頼りなげな影が人の輪郭をとり始めていた。ふらふらと宙をさまようような足どりで、一人の老人がこの町に現われた。

道端で擦れ違ふ人が何処からともなく伝わる冷気を感じて目をやると、老人の眸に陰鬱な翳りが宿っているのを見て、思わず足を止めた。人々は老人の後ろ姿を振り返りながら、その瘦軀から漂う気配に、夏の夜に忽然と訪れる幽霊を連想した。身慄いする頃には、老人の姿は再び光と光の織りなす蜃気楼の間まに閉ざされていた。

有木老人が垢じみた遍路姿に頭陀袋一つで矢継ぎ院を訪れてから、一週間程の日が過ぎた。老人はしみの浮いた日灼け顔をし、異様な臭いを発散させていたが、身を清め、新しい衣服に着替え、胡麻塩の蓬髪を撫でつけると、いかにも学者然とした、人品の浅ましからぬ印象を人に与えた。院長の賓客として迎え入れられた老人は二階の特別室を居室に提供され、日中のほとんどをそこで過ごし、そこから出ることはなかった。けれども、夜になると忍ぶように診察室の隣の研究室に赴き、遅くまで院長と何ごとかを語らっていたのである。

その日の午後、早彦は、病院の裏口に面した道を通りかかると、片足を引き摺った犬が後足を舐るようにして丸くなり、癖の傍に蹲っているのを見かけた。その犬は目やにを溜め、だらしなく耳の折れた、みるか

らに哀れて汚い老犬だった。老犬はブロック塀に背をもたせかけ、暖かな日溜りの中で日光浴を楽しんでいる風情だった。早彦は陽に当たりながら目を細めている老犬をしばらく眺めていたが、何を思ったか、足下の砂利を一掴みすると、礫を獲せた犬めがけて次々と放り始めた。居眠りを妨げられた老犬は赤く充血した目を腫き、力のない弱々しい唸り声を洩らした。その声が甲高い吠え声になるのにさほどの時間は要さなかった。

犬の鳴き声を聞き咎め、数人の患者が二階の窓から身を乗り出していった。病人たちは非難のこもった目つきで早彦を睨んだ。けれども、早彦は臆する素振りも見せず、悲鳴をあげる老犬めがけて小石を放り続けた。たまりかねた患者の一人が、「可哀相に、そんな悪さ」と叫んだとき、早彦は挑戦するように二階を振り仰いだ。だが、早彦が目にしたのは、叱声を浴びせた入院患者ではなく、彼らと隔離された特別室で佇んでいる有木老人の、窓越しに見える微笑だった。老人は吸い込まれてしまいうような柔和な目をゆるませ、まるで子供のあどけない悪戯を楽しんででもいるかに見えた。早彦は目を逸らすと、掌に握りしめていた最後の石を、思いきり犬の胴体に叩きつけた。病んだ犬は呻くような鈍い音を発した後、尻尾を垂れ、まろぶように逃げ出していった。

その夜、鶉町に地震があった。棚から物が落ちるということもなかったのだが、地盤が安定して原子力発電所建設の候補地にも上ったほどの鶉町にしてみれば、たしかに異変といえた。町の中には、その時、山鳴りのようなものを聞いたという者も現われた。二階の勉強部屋にいた早彦は、地震の直後、窓の向こうに見える山並の際が縁取りされたように薄く光っているのに気づいた。夜空と接した稜線に仄かな赤い光が走り、山頂近くでその色が強まり、山容が何本もの鬼の角のようにくっきり浮かんで見えた。

何度かの余震も過ぎ去り、早彦は寝床に就いていたが、赤い光の中に

聳える山々の暗い姿が妙に心に残り、なかなか寝つくことができなかった。そのうち、昼間見た有木老人の穏やかな微笑が目に見えなくなった。そういえば、あの表情は、この間の冬、火傷で死んだ人のものに似ている、何げなくそう思った。そう思ってから、早彦は慄然とした。息苦しさを覚え身を起こすと寝台を離れ、月光の青白く洩れ入る窓辺に寄って、暗闇の涼しげな空気を吸い込んだ。つまり、有木老人の微笑は死者の嗤いだった。

早彦は階下の一部屋から明かりが洩れているのに気づいた。その部屋は矢継院長の研究用の部屋だった。父親は自分以外の者が入室することを固く禁じていた。けれども、近頃は有木老人がそこを訪れているのを知っていたので、この夜中にといいながらも、早彦は強い好奇心が募ってくるのを抑えきれなかった。

病院のぐるりには一メートル半ほどの高さのブロック塀が建物に接して廻らされていた。早彦は物干しからロープを外すと机の脚に括りつけ、その端を窓から下へ垂らした。ロープを伝って塀の上に降りると、モルタル塗りの壁で体を支えながら明かりの洩れる研究室の窓に近寄っていた。カーテンが明り採りの小窓にもかかっていたが、金具と金具の間にできた布地のたるみから部屋の中を覗くことができた。

研究室の壁にはいくつもの棚が並び、そのどれもが書類や標本で埋められていた。窓の近くに黒光りした大きな机があり、その前に坐っている父親のがっしりとした背が見えた。最近まで応接室にあった簡易ソファとテーブルが運び込まれていて、テーブルに置かれた滑石製の灰皿で烟草が燻っていた。早彦の覗いている小窓が開けられているのは、充滿する煙を抜くためなのだろう。

有木老人は入口のそばのソファには腰掛けずに、壁際を往ったり来たりしながら書類や標本に目を通していった。矢継院長は一枚のレントゲンフィルムを手にする時、押し殺すような声で喋り始めた。

「ここを見て下さい。そうです、この微妙な突起が側頭部に大きな影響を与えている。そして、私が運び出したサンプルに共通してみられるのが、このラムダ状縫合における突起なのです」

院長は変色したフィルムを手許のスクリーンに透かしながら、太い指でその部分を示した。有木老人は標本棚から頭蓋骨の一つ取り上げ、皺だらけの手でその後頭部を擦った。院長が人差指で示したのは、白く浮かび上がった頭部側面写真の、頭頂骨と後頭骨の繋ぎ目の部分だった。

それは、ぼんのかぼを頭頂へと迎っていくと途中にある箇所、早彦の目にも白い光を透かした突起が褐色の地から際立って見えた。老人は手にしている頭蓋骨の拇指大の尖った部分を瘦せた指でなぞった。

院長は背凭れのついた廻転椅子をめぐらしながら太縁の眼鏡を外し、セルロイドの蔓をハンカチで丁寧に拭いた。

「はあ、やはりお分かりですか。——もともと、それほど大きな角が生えたものは他にありませんからね」

低い声音の底に、上ずる声を押えようとする無理が潜んでいた。そのため、院長の喉から数回、引き攣るような咳が洩れた。

「これか……」

有木老人がひっそり呟いた。それから、何ごとかを案ずるような遠い目つきをして、掌の上の頭蓋骨を見つめた。

昭和十二年、北海道帝国大学に医学部第五外科が新設されると同時に、有木博士はその主任教授に任官された。博士はその二年前に「情動の科学的考察」という論文を発表していたが、第五外科の新設と博士の登用の際にはこの論文と関連した帝国陸軍の強力な後押しがあったといわれる。

当時、欧米の心理学会や精神分析学会では人間の情動や性行動についての研究が盛んに行われていたが、とりわけ、情動の起源が脳にあるのか、それとも身体末端部分にあるのかという研究が注目を集めていた

のだった。有木論文は「情動の発生は海馬体に起因する」という大胆な仮説を提唱するもので、それは性行動を重視するフロイト学派の精神分析学を、解剖学的に、あるいは脳神経学的に裏付けようとする試みだった。

情動とは「急激に生起し、短時間で終わる、比較的強力な感情」と定義され、主観的な内的体験であり、行動的・運動的反応として表出され、同時に内分泌腺や内臓反応の変化を含んだ生理的活動を伴うと説明される。

さて、大脳のうちで系統発生的に古い部分を大脳辺縁系と称するが、その中でも皮質部分は古皮質・原皮質・中間皮質・傍辺縁構造に区別され、有木博士のいう海馬体とはそのうちの原皮質に相当するもので、これはさらに海馬・歯状回・海馬支脚という部分から成り立っている。

有木論文の発表された二年後の一九三七年、海外でも、J・W・バベツツという研究者が情動の経路について言及している。有木論文とほぼ同じ趣旨で、「情動は海馬体で形成され、脳弓をへて乳頭体へ伝えられ、そこから傍辺縁構造にある視床前核、さらに中間皮質の帯状回に達する。帯状回は情動経験の受容領域である」というものであった。

これらの仮説は、それまで嗅脳と呼ばれ、嗅覚だけに関与すると看做されていた大脳辺縁系をクロースアップするとともに、その後の研究が進むにつれて、摂食行動・性行動などの本能的行動にも関与していることを明らかにしていった。

有木博士は自らの仮説を実証するため、脳外科学を専門に研究する機関の必要を唱え、文部当局に上奏した。これに関心を示したのは帝国陸軍上層部だった。陸軍の秘密部会は「性格改造の外科的研究」を特務とする条件に第五外科の設置を約束した。博士にとって有難かったのは、研究に必要な実験材料を潤沢に提供しようという内密の申し出だった。いうまでもなく、海馬体の研究に欠かすことのできない生きた脳が手に入るようになったのである。

ロボトミー、つまり前頭葉白質切除手術によって前頭前野と間脳の線維連絡を切断し、妄想型の分裂病や強迫神経症・退行期鬱病を治療したという報告は一九三六年に提出されているが、このような内外の学問的進歩を目の当たりにして、軍部の急進的な高級将校が人間行動の重要な因子である情動や本能を外科的にコントロールできうということに目を向けたとしても、異常だとばかりは言い切れない。日本は八紘一宇の理想の下に着々と挙国一致の体制を固めていたのだった。

けれども、当時の脳外科学の技術水準は決して高いものではなかった。脳損傷などの場合、患部を発見するという段階でさえ、一度開孔してみなければならぬという状態だった。脳というものがどれほど微妙で不安定な組織であるかを示す例にコントロールという現象がある。脳は頭蓋骨内で脳脊髄液に浸され浮遊した状態になっているが、頭部が破壊されたり孔が開いたりするのは別にして、ある衝撃で閉鎖性頭部外傷を受けた場合、損傷を受けるのは直接に打撲を蒙ったところではなく、反対側の、頭蓋骨と激突した部分である。この現象をコントロールというのだが、頭蓋骨の中で、水に漂う豆腐のように、脳はいかにも弱々しげに存在している。この繊細な組織に対して、損傷部位の決定すら剖検に頼らざるをえないという程度の技術で頭部手術がなされていたのだから、いかに危険を伴うものであったかは窺い知れよう。

（部位決定の技術については、戦後になって、頭蓋骨に孔を開け脳室に空気を注入したり腰椎から空気を注入する気体脳室写や、頸動脈や椎骨動脈から造影剤を注入する脳動脈写などの脳室撮影の方法が開発されたが、依然として脳に与える危険性が大きいため、後年、脳スキャン・脳シンチグラフィ、さらにCTスキャン——コンピュータ断層撮影法——へと改良されたのは周知のことである）

一九三七年、H・クリューバーとP・C・ビューシーによって、海馬と中間皮質の海馬傍回、扁桃核と呼ばれる古皮質梨状葉の皮質下核などを含む側頭葉の両側性切除手術の報告がなされたが、その結果、性行動

の温和化や食物嗜好の変化がもたらされることが明らかにされた。有木教授は、大脳辺縁系が人格に及ぼす影響の甚大なることにいっそう自信を深め、多くの実験を繰り返した。

矢継院長の肥った顔が続んだように見えた。

「先生は、亡霊に逐われているのですか」

言葉のうちに、擲論するような響きが籠っていた。

この十年余、たしかに、有木老人は何かに逐われるような旅を続けていた。だが、それは、なすべきことを失ったからだ——わしは老いばれたのだ、老人はそう思った。

「研究は、まだ完成していない」

深夜の研究室に、敵しく断言する声が響いた。その一言でうちのめされた老人は、骸骨のような瘦軀を惨めにふるわせ、悲痛ともいえる吐息を洩らした。わしはただの老いばれだ、老人は再びそう思った。それから院長の鋭い視線を躲すように一息つき、寂しげに笑った。

院長は姿勢を正すと、蹲るようにソファに埋もれている老人に向かって言い募った。

「人体実験が続けられたからこそ、脳外科学の進歩があったはずだと思います。我々は科学を信奉するものです。科学の歴史からみれば、感傷的に過ぎるのは個人主義の弊というものでしょう。科学を個人に還元してはならない。しかし、だからといって、国家目的とか人類などという抽象性に結びつけようというわけではありません。そんなことは科学の過渡的な傍証にすぎないのです。科学はただ事実であり、人間が唯一事実に関与できるのが科学だというわけです。だから、戦争も虐待行為も、すべて国家という抽象性とその責めを負えばいい。ははは、それでも国家はその抽象性を剥ぎ取られたことなどなかったのです。……先生は膨大なサンプルを目の前にして手を拱いておれなかった。つまり、事実の歴史の中にいる一科学者であったにすぎない」

虚ろに凝んだ老人特有の眼窩の奥で憎しみの罩められた光が閃いたように見えたが、すぐに深い悲哀の色調に遮られた。それから重く閉ざされた口を開き、有木老人は一言一言区切るように呟いた。

「このわしを焚きつけるのは、これで何度目だろう。……君は特別だ。わしは今でもそう思っている。……君はたしかに科学者というものの非情さと冷酷さとを備えている。君にとっては、いかなる手段や方法も、もちろんそのことに付随する道義的な責任や人としての悲しさも問題にはならぬのかもしれない。……今にして思えば、大脳辺縁系の研究に没頭していた頃のわしにしても、君に劣らず、そのような科学の狂信家だったのだろう。だからこそ、あの戦争の中で学問にだけ邁進してきたに違いないのだ。……国家の好遇は、まさに千載一遇だったわけだ。わしにとっては、国体の運命も、人々の生き死にも、何ら関心を払う必要のないものだった。わしは学問の自己増殖のうちに身をおいていたのだ。大学の研究室で、何ものからも無関係に、ただ研究さえ続けられればよかった。……」

北海道帝国大学医学部第五外科の主任教授だった老人は、そこで言葉を跡切り、遠い過去を振り返るように宙を睨み、それから深い物想いに突き落とされた。

有木教授の門下生だった矢継青年は、応召の日まで教授の忠実な助手を務めていた。その青年医師も、十数年の歳月を経て、今や肥満した軀を持って余し気味の中年の姿に変貌していた。矢継院長は太った指を胸元で組みながら、押し黙った老人を睨すように口を開いた。

「戦後になっても、先生は大学の厚い壁に守られていた。あれほどの歴大な生体実験を手がけたにもかかわらず、戦犯に問われることもなかった。あらゆる実験が中断されたのは当然としても、私が復員してまもなく研究室を訪れたときには、その痕跡も窺われなかった。……けれども、先生は雌伏でもするようには、山積みされた書物の間で息を潜めておられた。そして、それは暗い顔で書類を睨んでおられた。実験科学者であるべきはずの先生は、書物と資料の山に埋もれていた」

たしかに、有木教授は戦犯に問われることを警戒していた。それは、戦時中に執刀した被術者の大半を外国人が占めていたためでもあった。辛い、第五外科のスタッフは少数精鋭を旨として構成されていたので、実験の内容が外部に洩れることはなかった。

だが、サンプルとして残された被験者の頭蓋骨の処理には神経をつかわなければならなかった。敗戦の様相が色濃くなり始めた頃から、有木教授は地下の霊安室を閉鎖し、そこに標本を運び込ませると、数人の関係者だけを率いて、その乾燥した頭蓋骨を粉々になるまで鉄槌で叩き割った。そして夜中になると叩き割った骨の粉を運び出し、あちこちの川や海岸で廃棄したのだった。脳のサンプルは細かく裁断した後、実験用の動物の屍体や内臓にとり混ぜて出入りの業者に下げ渡し、胴体の方は、もともと極秘のうちに搬入されていたので、実験終了後、再び隠密裡に送り返されていたため問題はなかった。

こうして戦争終結までに、有木教授は人体実験の物質的形跡を隠蔽し、戦後しばらくの間、実験結果を抽象的な資料に書き換える作業に没頭した。矢継青年が研究室に戻ってきたのはその頃だった。

ところで、教授はその資料分析の過程で、海馬体仮説に不完全な部分があることを発見していた。それは、海馬体と視床下部を別々に切除したとき、被験者の術後反応が異なってくるという点だった。情動の原因の全てが海馬体にあるとする教授の仮説からは考えられないことである。有木教授は、あと数回の実験が必要だろうと考えていた。しかし、自ら墓穴を掘るような真似は避けねばならないも思った。つまり、実験科学者としての燃え盛る情熱に堪えねばならなかったのだ。

たしかに矢継院長の言うように、有木教授は研究室に逼塞し、陰々滅々としているように見えはしたが、その裡にあるものは悔悟の気持とは別のものだった。

「わしはただ、国家の好遇の得られぬに至って、人体実験は放棄しなければならぬ」と思い定めただけだ」

老人は言葉が続けた。

「わしは、わしのなしたことに何の責任も感じてはいなかった。それは、君の言うように、国家が抽象的で科学が事実であるということとも違う。——わしは忘却という方法を選んだにすぎない」

……思想的な責任、政治的な責任、戦争の責任、国家に追従した責任、あるいは積極的に命に従った責任、殺人の道徳的および倫理的責任、存在することの責任、そのようなものが、ただの砂粒にすぎない人間にとっていったい何だというのだろう。少なくとも、それは社会的に糾弾される性質のものではない。もしそんなことを認めてしまえば、それこそ責任という妄想を自ら輓にするような愚かな社会性というものに違いない。それはまったく個人的なことで、泡沫のような人間の、そのたった一つの薄膜の内部で、責任というものが肥大したり窄すくったりすればいいだけの話だ。しかし、それでさえ、時代において何事かをなしたという傲岸な妄想なのではないか。——老人はそう考えていた。

……戦争行為という特殊な時代の中ですら、わしらは何事もなさなかった。なしうるはずがないというのが、ただ一つの事実なのだろう。責任を問う者、責任を覚える者は、ひとしなみに不遜なる妄想を介在させているにすぎない。そこには、嫌悪すべき自己肯定の危げな綱渡りがあるばかりだ。責任は個人の内奥に還元されるという上品な論議にしても、それこそ妄想過剰なので、世界とか人類を永遠の対象にして無理やりそれを個人に結びつけるという、猥雑で、ひねこびた、粗末な精神の生み出す襁褓むすぶのようにしかみえない。このような思いを、近代的自我の蒙昧な闇に囚われているというのだろうか。そのように批判する人は、たしかにその批判をそれなりの知識として整合化し、そうすることによって己れの闇の中に自己を築き上げ、ついには類などという概念操作で救われるのかもしれない。しかし、それがどうしたというのだろうか。世界は

個と無縁なのだ。またそれゆえに、鉱物の裡に無限に広がる暗黒宇宙というイメージはいっそう魅力的に違いない。だが、かといって、それとて何ものでもない。……わしらは累積する忘却を通して、目前にあるものを積み上げることのほか何もできない。そのような形でしか、あらゆる現実を、あらゆる空想を、あらゆる行為を生きていけないのかもしれない。責任などというのは、つまるところ、忘却できるか否かということの紐帯にすぎないわけだ。忘却することで、わしらは別のものにわしらをならしめて、ともかくにも生き続けさせる。記憶というものが累積される死であるなら、それは忘却の一つの形態であり、忘却は生と死とを超越的に押し包む全体性ということにもなるのだろうか。——老人の考えは詭弁ぎべんじみていたが、韜晦たうかいとも異なっていた。

「わしは人体実験という事実を忘却するという方法で解決しようとした。わしは大脳辺縁系の研究を一切放棄するつもりでいた。しかし、実験の不完全さがわしに復讐ふしゅうしたのである。——わしは、忘却すべき累積する死そのものによって激しく身を焦がされていたのだ」

老人は訥々と述べながら、灰皿で喫われずに形をとどめている長細い烟草の灰を静かに摘み、その残骸の姿を壊滅させた。そして、灰にまみれた指先を拭おうともせず、新たな一本を取り出し、あえかな火を点して吸い込むと、あまりに濃い、蒸れた色の煙を吐き出した。

五

陸軍の秘密部会はもともと生物学的な戦争手段を開発するために組織されたものだが、昭和十二年にロボトミーの成功が伝えられると、外科的手法による精神病理学的な人格改造という問題に関心を向けるようになった。秘密部会は大脳における何らかの外科的刺激が大きな人格変化を

もたらすことに着目し、すでに発表されていた有木博士の海馬体仮説がこの分野で最も優れているのを知った。そこで、博士の唱えていた第五外科実現のために便宜を図り、多大の援助を与えたのだが、研究の進捗が見られぬまま太平洋戦争に突入することになった。秘密部会はここで方針を旧に復し、活動の重点を毒ガスや細菌による兵器開発に置かざるをえなくなったが、有木教授への援助はなおも継続された。

人格改造の研究が間に合わなかったのには理由があった。戦前の陸軍秘密部会への研究報告では、手術によって満足のいく結果が得られた例はわずか五例で、これはそれまでの全手術例の二パーセントにも満たない数字だった。つまり、残りの九十八パーセントというのは失敗例であり、それは死と同義なわけで、その異常ともいえる危険率が研究を大幅に遅らせたのである。

研究材料として提供された三百余人の被験者の多くは、精神障害者、殺人犯、公安関係の囚人、朝鮮人労働者であった。そして、成功例五例はすべて殺人犯の中から出ていた。しかし、その五例の被験者はすでに死刑判決を受けていたため、成功が確認されると即刻送り返され、間をおかずに刑の執行があったらしい。また、他の被験者は、病死、自殺、逃亡を図ったかどによる射殺、行方不明など、さまざまな名目で闇に葬られた。もっとも、この三百余例は戦前のもので、戦時中の記録は存在していない。それには有木教授自身が処分したことも関与しているが、軍部の方でも調達する被験者が捕虜などを多く含むようになったため、資料を残すのをためらったせいでもあった。こうして戦争も末期になると、実験材料の提供は数こそ増えていったが、研究の成果に対する期待は日毎に薄れていくのだった。

ところが、有木教授は実験に失敗していたわけではなかった。秘密部会から命じられた「人格改造の外科的研究」という面からみれば、たしかに研究の進展ははかばかしくなかったが、教授は実験の目的をそこに置いていなかったのだ。教授は、海馬体のさまざまなサンプルを分析し、

それに外科的処置を施して人間情動のパターンの変化をもたらし、大脳辺縁系の機制と人間の本来性とがいかなる相関関係を持っているかを明らかにするという研究テーマから一歩も足を踏み外そうとはしなかった。実際には、術後身体的に回復した者は報告例の十倍強であり、ただし、サンプルとしての性格強調のため全例とも典型的精神疾病を生じ、観察中に自殺する者が出たり、あるいは薬物による安楽死などの処置が講じられた。それでも、教授の研究は大きく前進したのだった。

有木教授は戦前戦中を通じて一千例のサンプルから、海馬体の萎縮あるいは肥大によって、特に情動において著しい反応の差違があることを確認した。それはまた、さまざまな度合による切除手術でも同様に確かめられた。基本情動とは、J・B・ワトソンによって、怒り、恐れ、愛の三つがあげられており、その他にも、喜び、驚き、反感、憎しみ、また、受容、嫌悪、悲しみ、期待などをあげる学者もいるが、有木教授の要素分析の項目には、それらに殺意と活性が加えられていた。

秘密部会に提出した報告では、こうした実験経過に触れずに、海馬体摘出後に行われた前頭前野と間脳の線維連絡を切断するという簡単な手術例だけを記載し、成功例として五人の殺人犯を時期を分けて退院させたにすぎなかった。

「君はなぜ、実験科学者の暗い情熱の炎を運んできたのだね……」

老人は徐ろに、そう訊ねた。疲れきったように見える肩の上には、蛍光灯の青白い光が夜の時間を留めていた。いつのまにか俯き加減になっていた矢継院長の顔が上げられたとき、それまでの傲岸さは陰を潜め、居ずまいを直すような素振りさえ見られた。

「ご承知のように、私は中国大陸で終戦を迎えました。——そしてそこで、毎日のように数十、いや数百もの死にゆきあっておりました。——それは何も特別のことではなく、あまりにありきたりの大量の死でした。医療施設も医療器具も医薬品も、満足というはおろか何もないに等しい

野戦病營で、慙擾の中で、ついには路傍で、あまりにも大量の死を見つけていたのです。——私は死に麻痺しておりました。そして、この大規模な狂気が真実狂気であるのか疑いつづけたのです」

日本軍は中国大陸で、その戦闘能力をいかに発揮していた。しかし、昭和十八年に、抗日運動のあまりの激しさに重慶攻略作戦を放棄すると、以降、後退戦を余儀なくされた。八路軍のゲリラ戦術に手を焼いた彼らは、各地で三光作戦なるものを展開していた。それは残虐無比な戦闘が繰り広げられていたのであった。兵隊たちはまるで錯乱でもしているように、その口許に怪しげな笑いを泛べ、咆哮をあげて、抵抗無抵抗にかかわることなく、膨大な数の中国人を殺戮し、蹂躪し、暴虐の限りを尽くした。軍規はいっそう荒廃し、戦闘も場当たり的でなし崩しのものに墮していき、弾薬のつづく限り、日本刀が欠け、折れ尽くすまで、ただ目前にあるものを殺し尽くせばいいというありさまとなった。けれどもそれは、立場が逆転したときのゲリラにしても、復讐に駆られた民間人にしても同じことだった。彼らは敗走をつづける日本軍を見るなり大包囲網を布き、盲撃ちに、雨霰のごとく砲火を浴びせ、銃弾を降らし潰走した脆弱な兵卒を鋤・歙の類まで振り上げては、どこまでも執拗に追いつめていった。

矢継青年は戦闘の只中にいた。敗走をつづける鳥合の群の中にいた。そして、すべてを見ていたのだ。指をもぎ、腕を断ち、目を抉り、鼻を削ぎ、頭を叩き割る残忍な殺し合いを、つぶさに……。その、狂気というにはあまりに正常で正当な殺戮を……。そして、至る所に血溜りができ、道には血が溜ってこびりつき、壊疽の発する強烈な腐敗臭と、晒された内臓に群をなして喰らいつく蠅の羽音、鳥の喚声……。矢継青年は、これが本当に異常なことなのか、時代や環境が異常であるから人間は異常者に変貌するのだろうか、と一度は考えてみた。しかし、そうした楽観主義がどうも怪しいもののように思われた。彼はあまりに圧倒的な、日常的な、累々たる死の姿から、そうではないと断定したのであった。

「私の日々なしていたのは、死にかかった朋友の腕や脚や胴体や目や鼻や頭蓋骨を継ぎ合わせ、貼り合わせ、あるいは断ち切り、そうやって確実に死に至らしめることでした。麻酔も消毒薬もあるはずはなく、そしてメスは錆び、鉤針は折れ、縫合糸さえ兵隊の着衣をほどいて使っていました。鋸を振るい、鉗を打ち下ろし、私のやっていたことは屠殺場の作業そのものでした。——ところが私は、そうすることを当然のように考え、少しも異常を感じてはいなかったのです。そればかりか、いつしか、そうすることによって生きる歓びすら見出しつつあったのです。それは陶酔のようなものだったのかもしれない。自分の触れているのは人間の道具にすぎない、この道具を死に至らしめることによって自分は情熱を享けている……。この思いは、先生が人体実験で手に入れたに違いのない享樂と均質のものではないでしょうか。私はそのとき、開頭手術を行っていた先生が、手術台上の脳髓にメスを振るい、吸入器で豆腐のように軟かい脳味噌を取り出している姿を思い出しました。——そして、その頭脳が、それも生きている頭脳が、他の器官と同じく、単に人間の道具にすぎないのかを、どうしても確かめずにはいられないという峻烈な昂奮に囚われたのです」

戦後暫くして第五外科に戻ることができた矢継青年は、再び有木教授の助手を務めるようになった。だが、青年は、すでに正気を恢復しつつある戦後の、その向こうに約束されている平々凡々と過ぎゆく静謐な日常に、心底飽々しているに違いない自分の姿を思い描いていた。青年は、まるで逼塞でもしているような教授に、頻りと「海馬体仮説」の研究続行を促しつつあった。青年は、いきなり老け込んでしまった教授の内奥で、実験への抑えきれぬ執着と暗い情熱が熾火のように熱を帯びているのを嗅ぎつけていたのだ。

矢継助手は教授の研究資料に目を通すうちに、戦時中に行われた人体実験の全貌をほぼ掴んでいた。その事実が明るみに出されれば、教授は

G H Q の追及を免れなかっただろうが、教授の決断を促したのはそのことのためばかりではなかった。海馬体が情動の原因であることを立証し、「海馬体仮説」の正しさを証明するには、あと数回の実験が必要だったからだ。そしてその実験は、戦争目的でもなく、それゆえに国家からの保護も命令も受けることのない、純粹に学問的な行為であるという自己弁護も試みたに違いない。けれども、本当は実験に対する執念でしかなかった。有木教授はその誘惑に屈し、実験を秘密裡に再開した。

戦後の混乱をよそに、有木教授と矢継助手の二人だけの開頭手術が数年の歳月をかけて行われた。被験者には、大学病院に収容中の重度の精神疾病患者、頭部損傷患者からピックアップされた数人が充てられた。そして十分な検討の結果、意外な事実が判明した。それは、脳内から視床下部だけを摘出した場合、術後の情動反応では完全に無反応となるにもかかわらず、海馬体のみの切除では、強い情動反応は失われるが、微細な反応曲線は完全には消えないということだった。このことは、教授の「海馬体仮説」が成立しないことを示していた。また、次に明らかになったのは、海馬体の海馬支脚だけの切除によっても反応曲線に変化が現われ、その切除の箇所と量に応じて術後反応の度合が異なってくるということだった。つまり、情動の原因が視床下部にあり、海馬体は制御的な役目を果たすという結論を導き出す。

しかし、教授は、この結果に悄然としたわけではなかった。依然として大脳辺縁系が情動を生み出す部位であることに変わりはなく、海馬体が情動と不即不離の、きわめて重要な組織であることを実験的に確認できただけでも満足だった。

この数度の手術と反応分析は昭和二十五年頃まで続けられたが、海外で P・D・マクレーンによって「大脳辺縁系は内臓活動を支配する内臓脳であり、これは個体維持や種族保存に大きな役割を果たす」という学説が発表されるに及び、有木教授は、海馬体と視床下部が表裏一体の関係をなすように、情動に限らず、大脳辺縁系全体の諸活動に海馬体が大

きく関与するのではないかと考え、海馬体の重要性を改めて痛感した。

また、被験者の一千例に及ぶ資料を検討し直した結果、新たな事実も発見された。それは、殺人犯の多くに海馬体の異常肥大がみられたということである。その肥大は支脚方向に顕著であって、海馬傍回を圧迫し、脳全体を後頭葉方向に押し出しているのだった。

「この部分です」

矢継院長は再び廻転椅子をめぐらし机上のスクリーンに向き直ると、褪色したレントゲンフィルムの一部を指し示した。

「あのとき先生は、骨格異常説や外傷性異常説の介在を嫌い、頭蓋の変形については触れようとはなさらなかったのでしたね。先生は、海馬体の肥大の原因が頭蓋の変形によって導き出されることはありえない、と言われた。脳は水中に漂う豆腐のようなものである、だから外部からの圧力に関しては何処でも均等の影響を受け、それゆえコントロールのよな現象が生ずるのであって、ましてや中枢部に骨格からの影響が現われるはずはない、そう説明された。しかし、情動反応の過度なサンプルほど明瞭に頭蓋の骨格異常が現われているということは看過できなかつたわけです。——我々は、海馬体が、情動に限らず内臓の機制においても主要な部位であることはつきとめました。けれども、頭蓋の変形という現象的事実につきあたりました。先生も、そのことに目をつぶるわけにはいかなかった」

「そのとおりだ。だからこそ、君の提案したあの忌むしい実験に同意したのだ」

老人の声は、わななくようなふるえを帯びていた。何か、よほど辛いことを思い出しているのか、老いた顔にありありと苦渋の色が泛んでいる。

——深い皺が刻まれている有木老人の顔を、闇の中を飛び交い、漆黒そのものに溶ける獣のように、高窓の外に貼りついて覗き見る双眸こそ、

矢継早彦のものであった。けれども、夜の研究室から滔々と流れ出る矢継院長の言葉が暗い声音を引き摺っているのに少年が気づいていたかどうかは窺いようもなかった。早彦の位置からは見えない院長の顔が、老人とは対蹠的に、何ものかの火照りに煽られて赤らんでいた。早彦の父親もまた、思い出すのものはばかられるおぞましさに囚えられていたに違いないのだ。そして、それゆえに、彼は熱狂者の姿をとっていたのかも知れない。

「私は第五外科で秘密に保管されていた頭蓋骨や記録、資料などをここに運び込み、それから十年余、詳細に研究いたしました。そして、頭蓋後部の突起、すなわちこの角がラムダ状縫合の上部にしか見られないことを確認したのです。——先ほどは骨格異常と言いましたが、この頭頂骨と後頭骨を分かつ部分の突起は、力学的にみてまったく自然であり、何ら異常ではないのです。つまり、骨の外部からは異形のもののように見えますが、これを裏返して骨の内部、脳の側から見ると、この変形した頭蓋は実にびったりとした容れ物だということです。私が推理しまするに、海馬体の肥大によって大脳の頭頂後頭溝が下部へずり落ち、その結果内側に引っぱり込まれることで溝の上部が突出し、その運動の影響によって頭頂骨の縫合部が盛り上がるのではないかと……。それに気づいたとき、我々の発想が結果の方ばかりに向き、発生の過程にまで及んでいなかったことに思い当たったわけです。異常は、この発生の時期に遡らねばならなかったのです。——私が注目したのは、脳細胞の増殖の第二のピークといわれるシナプス形成期でした」

神経系の発育速度は胎児期と出生後しばらくの間がピークとされ、出生時には重量にして成人の四分の一、一歳時では二分の一に達する。第一のピークである妊娠十〜十八週では神経芽細胞の分裂・増殖が繰り返され、妊娠中期から生後十八カ月にかけての第二のピークでは、神経膠つまりグリヤ細胞と、髄鞘の主成分であり栄養素ともいえるミエリンと

呼ばれる半液状の類脂肪質が産み出されるとともに、さらにシナプスが形成され、出生前には毎分二十五万個以上の神経細胞がつくられるといわれている。これらの時期は神経系の基礎が固められる最も重要な時期であり、出生後には髄鞘化がよいよ活潑に展開されていくのである。矢継院長は海馬体肥大をこの二番目の時期に想定し、その影響が頭蓋にまで及ぶ過程もここに求めたのだ。——この時期に何らかの理由で海馬体の肥大化が起こり、これによって海馬体を取り囲む海馬傍回が弱い方向、つまり水平方向に押し出され、視床脳といわれる第三脳室などを圧迫しながら頭頂後頭溝の上端を持ち上げ、そのためにラムダ状縫合に力学的変化をもたらし、それに対応して頭頂骨の特定部分に形成的に影響を与える、と考えたわけだ。矢継院長は、こうして生じた頭蓋の突起が、さらに頭蓋全体の比率にも変化を与え、そのことによって側頭平面の左右の大きさに重大な影響を及ぼしていることも見出していた。つまり、突起が生ずることによって頭蓋骨の形が変わり、その頭蓋骨の形が逆に側頭葉に影響を与え、脳自体の形を変えてしまうということがある。

「脳はただの豆腐ではなかった。たしかに、中枢部分については頭蓋からの影響を直接考慮に入れる必要はないかもしれない。しかし、脳の外縁部は頭蓋骨から大きな影響を受けているわけです。整理して考えてみると、全過程の大因ともいべき海馬体が頭脳全体に及ぼす影響力は、予想以上のものであるということになります。——ところで私は、海馬体の脳へ及ぼす力学的・構造的な作用、また頭蓋骨への作用、さらに頭蓋骨から側頭葉への、いや脳全体にわたる反作用を一連の解剖例によって確認してきました。もちろん、大学を逐われ、それでなくても人体実験のはばかられる時代に、十分な実験材料が入手できるなど思いもありません。私の手がけたのは、掻爬手術による摘出児、死産児、未熟児出産による死亡児の解剖でした。これらの解剖例は相当の数に上りました

が、かえって海馬体の成長過程と頭脳の成長の関係をつぶさに観察することができました。そして、それらの分析から驚くべき事実が判明したのです」

闇というよりはあまりに濃密な暗さを湛えた夏の深夜、滞ったままこそとも動かない蒸れた空気……、すでに寝静まった世界のどことも異なり、矢継医院の禁断の一室からは、煌々とした蛍光灯の明かりが、そのような暗部に向かって吐き出されていた。研究室の一角では、その光の露骨な輝きを受けて、標本棚のニスを塗られた棚板の縁が脂じみたぬめりを揺らしていた。その棚を埋めるように、煤けた頭蓋骨の完全標本が十数箇と、おそらくそこから摘出されたに違いない灰色の脳葉が、容器の中で変色したフォルムアルデヒドの液に浸されて、それぞれの数だけ置かれていた。別の棚には、同じようなガラス容器が、ただし透明な澄んだ液に漬けられた、さまざまの形、さまざまの大きさの胎児や嬰兒の標本が数十箇並んでいた。密封された数十体の標本はそれぞれの成長の度合に従って整理されているが、白蠟のような気味悪い肌に絡みつく毛髪が生命を残してなお伸びつづけてでもいるのか、保存液の中に棲みつく藻類のように、胎生期のものに近づくにつれて隠微な色合いを濃くしていた。そして、それらの標本のすべてが頭部を縦に切り割かれ、断面を埋める柔かな内容物が一目瞭然に見てとれた。

矢継院長は壁面を埋めている標本に妖しい一瞥を与えると、いまやただみすばらしいだけの老人を振り返り、熱に浮かされたように先をつづけた。

「——海馬体肥大は後天性のものではないということです。なぜなら、妊娠中期以降の解剖例のすべてに共通して、海馬体に充当する部分に、成長の抑制活動、つまり組織破壊をもたらす細胞活動の痕跡がみられたからです。これは組織自体に備わった機制とすることもできますが、ただそれが一様に同じ時期を境にして現われているわけです。このことは、まさしく遺伝的な性格をもつものに他ならないということを証拠づけて

います」

何ものからも無関心で、時を隔てた一切が無意味であるともいいたげに半ば閉じられていた老人の眼が、ここで峻しく炯った。

「君は初めからそう考えていたのだな……。だから、あの実験を強行した、あの最後の実験を……。そして、わしから——」

その嘎れた声は、怒りとも諦めともつかぬ、あるいは自責の思いともとれる微妙な抑揚をしのばせて、二人を取り巻く標本と化した死そのものの暗い翳りの部分に沁みとおっていった。だが、矢継院長のひときわ昂揚した声が、老人のその言葉からあらゆる余韻を奪った。

「私は最初、脳内に腫瘍のようなものが生じ、そのために情動異常、いや情動が過激に昂進すると考えていたのです。しかし、海馬体にも、その周辺組織にも、そのようなものの存在はみられなかった。その兆すら認められなかった。そうなると、あとは海馬体の組織上の問題、それも遺伝的な要因しか考えられないわけです。これは、私による『海馬体仮説』なのです。——おっしゃるとおり、これまでの研究は、このことを確認し証明するためのもので、私はあの当時から、遺伝的な要因が大きな比重をもつということを確信していました。だからこそ、その頭蓋骨による実験を強行したのです」

テーブルの上に置かれている一箇の頭蓋骨に、有木老人と矢継院長の目が注がれていた。黝んだ頭蓋骨の後頭部に生えた、一目でそれと分かる突起が、二人の医学者の硬ばった視線に晒されていた。

その頭蓋骨はある殺人犯のものだった。戦後の混乱期に、北海道各地を舞台にして、被害者数十人に及ぶ無差別殺人が行われた。犯人は捕えられたが、その数カ月後に奇妙な死を遂げ、何のための大量殺人であったのかは永久に謎になってしまった。殺人狂と看做されたその男は、逮捕後、精神鑑定のため北大の精神科に送致されていたのだが、いつのまにか第五外科に廻され、そこで死が伝えられた。大学当局はロボトミー手術が失敗したとだけ発表し、詳細については固く口を閉ざしていた。

当時、まだGHQの指揮下にあった警察当局は、荒廃していた大学の復興に尽力していたGHQの意向を受けて、犯人が極度の精神異常者である旨の大学側の報告に信を置き、それ以上立ち入ろうとはしなかった。

ところが、脳神経医学会に属する学者が口火を切った形で、ロボトミ―手術と第五外科に対する世間の批難が昂まると、大学当局はこれに抗しきれず、第五外科の廃止を決定した。翌年、この手術を執刀した有木教授と矢継助手は、逐われるようにして大学を去った。

有木老人は、ふと口を開きかけたが、思い直して再び口を噤んだ。そして、その夜の会話は打ち切られた。なぜなら、次の言葉をつづけるには、二人ともあまりに深い痛手を受けていたからであり、おそらくそれが二人の憎悪の一致点だったからかもしれない。

六

明かりが消され、研究室のドアが施錠されるあえかな金属音が沈静(しじや)の中を伝わるのを聞いて、黒猫のように小窓に身を寄せていた小さな影が振り返った。月明とてない真夜中だったが、いつのまにか夜空には満天の星が粉のように鑊(おぼろ)められ、死者たちの最期の吐息のような妖しの光を洩らしていた。

早彦は足裏全体をブロック塀に密着させて、そろりそろりと移動していた。二階の病室から、ときおり、胸の病を連想させる咳や、手酷い悪夢にでも魔(ま)されているのか、苦しげな呻き声がこぼれ落ちた。早彦は自分の部屋の窓から頼りなげに垂れ下がっているロープまで辿りつくくと、獣のような素早さでそれを伝った。

早彦はまたも寝つかれなかった。彼は二重の秘密を抱いたことになる。

悪魔じみた二人の実験科学者の隠匿された会話、そして人の知りうべくもない深夜にその会話を窺っていたという秘密――。この秘密は、世界中の誰もが知るはずのない、ただ深更の重く澱んだ時の記憶だけが留めおく性質のものだった。けれども、時が無限でありうるとすれば、いとも簡単に放擲されるほどの些細な記憶にすぎないのかもしれない。まどろもうと努める早彦の頭の中に、どういうわけか、陽光がくすんだ黄金色になって差し込んでいる中学の理科教室が浮かんだ。

――夏休みに入る少しばかり前の放課後、掃除当番の点検を命じられて、早彦は一人で理科教室に居残っていた。

夕方の教室は深閑としていた。実験用の広い机の上は整頓され、暗緑色の黒板もすっかり拭われ、化学記号が乱雑に書き散らされていた痕跡すら留めていない。教室の奥には統き部屋のようになっている薬品室があった。その引き戸には立入厳禁の木札がぶら下がり、いつも鍵がかかっている、生徒は入室を許されていなかった。けれども、その日、早彦は教師から託されていた鍵束を手にしてしまった。誰もいないことも手伝って、早彦は一本の鍵を選び出すと、そっと鍵穴に差し込んでみた。

引き戸を開けて中に入ると、ガラス製や金属製の実験器材が無造作に小部屋のあちこちに置かれていた。壁一面の棚には、変色したり、文字のインクが滲んだラベルの貼られた色とりどりの薬品瓶が分類され、所狭しと並べられていた。窓は直射日光を遮る厚手の黒いカーテンで閉ざされ、そのため、理科教室の方から洩れ入る幾ばくかの光が差し込むだけで、部屋の中は薄暗かった。

早彦は薬品室の片隅に、そこだけ頑丈に木の枠で固定された、二重になったガラスケースがあるのに気づいた。内側のやや平べったいケースの底にはびっしり砂が敷かれ、その真中に、半ば砂に埋もれた一箇の瓶があった。早彦は外側のケースの扉から開けようと、廻らされた鎖を結び留めている錠に合う鍵を捜してみたが、鍵束の中に該当する鍵はみつ

からなかった。あきらめて二重になったガラス越しに覗くと、透明な瓶に貼られたラベルの上半分が砂から顔を出しており、そこにニトログリセリンと書かれているのが読み取れた。早彦は、透き通った液体の姿をしたその薬品が危険なものであることを知っていたので、人けのない、校舎の外れにある理科教室の、それも脆いガラスのケースにそれが保管されているという事実不思議な感動を覚えた。

早彦は長いことその前に佇み、幾重にも張り廻らされたガラスの中の液体に見とれていた。あるいは、ガラスを破る瀬戸際の、その危険な雰囲気酔いしれていたのかもしれない。

目を開けると、カーテンの隙間から窺われる外の空気がうっすら白み始めているような気がした。どこに焦点を結ぶでもなく、寝たままの姿勢でぼんやりしていると、天井の木目や細かい疵、しみ、空中に漂う埃の微粒子、網膜を流れる血液が、それぞれ触れ合ったり離れたり入り組んだりしながら不規則な模様を作りだしていた。それらが瞳かれた眸を通り、脳髄に達し、思念の中で明瞭なイメージを喚起するのには、それほど時間は要さなかった。

妖しげな星の光、二人の医者のおんな顔、頭蓋骨に肉付けされる乾いた皮膚、二つに裂かれた胎児たちの海、大脳の手術風景、戦場での殺戮の様子、粉々になった骨片、臓物に紛れ込んだ脳味噌、風のように全世界の空気を充たす死の微粒子、一筋に繋がる血脈の予感……、いくら目をつぶっても、混乱したイメージの切れ端が走馬燈のように鮮やかに駆け廻っていた。

早彦は眠ろうと努めた。しかし、眠りは容易に訪れようとはしなかった。腋の下から零れる汗がその苛立ちを深めもした。早彦はやむなく、肉体と魂の分離の術を試みることに思いを決めた。

離魂術は、早彦がただひとりで考え出したものだ。以前、気持が昂揚

して眠られぬときに、少なくとも軀だけは懸ませねばならないと思い、そのおり偶然に編み出したのである。それには、まず、眠ろうという意識を捨て去ることが肝要だった。ただ、その分だけ軀の方に眠りを強制する必要があった。早彦は、寝返りをうつなどの姿勢の変化を禁止した。そのため、つねに仰向けになって両脚をやや開き加減にし、胸や臍の上で軽く指を組み合わせる。そして瞑目するわけだが、このとき、なるべく外界との接触を断たないように、耳障りにならぬ程度の物音が必要だった。もっともこれは、馴れるにしたがって絶対に必要というわけではなく、早彦は最初のうち、目覚し時計や腕時計の歯車の音に神経を集中させた。つまり、眠りに入らぬよう、意識が覚醒している状態をつねに確認しなければならぬのである。

その次に、瞑目したまま、さまざまの思念を映像化した。これには静止物、つまり山や谷、森、海や川の遠景などを切り取るといった方法もあるが、これらは思考の流動によって細部へ向かうため、かえって繁雑になるので、早彦はもっぱら人の顔や顔の一部分、とりわけ目や唇や鼻の形などの動的な対象の要素部分、いわば形態の特質性といったものの方を好んだ。形態の変化がなおのこと意識を集中させやすく、飽きもこないからだろうか。このような断片が暗い翳りの中で光を帯びたり、より濃厚な隈取りをつくって、写真のように鮮明に浮かんで消えした。早彦が近頃とみに選ぶ画像は、顔見知りの数人の少女の唇や脛、雑誌のグラビアなどで見た年上の女の乳房や尻、そして想像上の、薄いピンク色の肉襲の中心に目のさめるような真紅の部分をもつ女陰などであったが、性的な、あるいは卑近な対象からの連想の方が比較的画像は安定するようだった。画像がある程度安定し、さらに別のものに転換していくときには、未知の女の顔や実際には見たこともない肉体の部分が次々に現われ、明確な輪郭を伴って固定されるのだが、この段階になると、いわゆる半覚半睡の状態に到達しているといえた。

ここまですると、自ら軀を動かすことは不可能となり、その替わり外

の物音を起きてるときと同じに聞くことができ、そのように注意を外に向けても目覚めることなどない。こうなると、意識はそれ自体肉体を持っていてるのかのように面白いほど自由に動き回れた。例えば、夢の捏造などということも可能だった。

早彦の場合、こうした技法は、夢を構成し、操作し、演出し、自らを登場させるために大いに利用された。そしてその夢の内容は、未知の領域、禁忌の分野、つまり欲望の実験場ともいえるべきものだった。それゆえ、日常の機微や感情の繊細な起伏など冗長にしか感じられず、肉体の具現、欲望の具現を直接主題にした粗野で生々しいドラマが創り出された。町を闊歩する女を片端からひん剝いて犯したり、策略の限りを尽くして意のままに従わせたり、往來の人々の首を刎ねたり、生きたまま解体したり、油を浴びせて火焙りにしたり、汚穢にまみれていたいけな少女たちを強姦したり、鋭利な刃物で死体の肉を削いで人肉の刺身を啖ったり、空高く飛翔して抱えている嬰兒を放り投げ、その柔かな肉塊が四散し、地上で泥のように潰れるさまを嗤ったり、その姿勢で都市の雑沓に糞尿の雨を降らしたり、強力な毒物を撒き散らし地球上のあらゆる生物を死滅させたり、巨大なブルドーザーを駆使して人々を蹂躪し全ての陸地を腐肉の海と化させたり……、とにかく、考えつくかぎりの瀆神と暴虐が可能だった。これはまさしく、夢を己れの麾下に置く、妄想の王の完全勝利であり、大いなる帝王学とでもいうべきものに違いない。

この夢見の方法がそもそも離魂術であると思いつたのは、ある夢の中で、自分の肉体から脱け出ることが果たして可能だろうかと考えたことが契機になっていた。

そのとき、早彦は、自分の思念、あるいは意識の姿がどのようなものであるのかを、その所在によって確かめようとしていた。早彦は意識をさまざまに移動させて、いま、軀のどの部分にあるのかを掴もうとした。それは、あたかもガラスの人体という容れ物の中をさまようごときものだった。人体という殻に意識をぶつけることによって意識の形態を探る

うとしたのだ。早彦は肉体の中を駆け廻り、いつのまにか堪えようのない息苦しさを感じていた。その苦しさは、どこをどうさまよっても、必ず撥ね返るしかない絶対の壁が存在するということに起因していたようだ。夢の捏造を経験していた早彦にとって、そのことは許し難いものだった。

だが、早彦はとうとう出口を見出したのである。そのときには意識の形態という問題は忘れ去られ、早彦の頭の中にはただ肉体から脱け出すということのほかもなかった。その場所は臍だった。ほんの小さな孔であった。早彦は、意識が靄状とも粘稠性の液体ともつかない細い糸になって、その孔から体外へ流れ出ているのに気づいた。いつのまにか、意識は空中に滞り、その位置から自分の寝姿を見ることができた。早彦はここで初めて、魂は肉体を離れることができると実感した。そして、夢見の方法が魂と肉体とを分かち方法であることを知ったのだ。

その感覚は現実のものとは異なって、まるで夢の続きのようだった。そのうちに、捉えどころのない自分がいつしか部屋の壁をいくつか通り抜けていた。闇の中をふらふら舞っているだけのようにも感じたが、どこかに一直線に突き進んでいるようにも感じられ、自分が何ものかであるという意識が稀薄になっていくように思われた。——早彦の眼差しは彼方に、予備燈のつくる薄ぼんやりした光の暈が現われ始めた。その小さな光の溜りの中に、俯せになって白い尻を宙に突き出した女と、それを後ろから両手で抱えている男の姿が、一つの影になって浮かび上がっていた。光と影の境にぬめりを帯びた肉体の丸みがあるのを見て、二人とも裸なのが分かった。早彦は襖を突き抜け、性行為に耽っている男女の上にとどまっていた。しかし、二人の男女のいずれも、中空に滞っているものの存在には気づかなかった。そのとき、彼らを見下ろしている早彦の意識に、二人の心の中の岐きが一瞬にして伝わってきた。

(……この女、声も出さない……。あの男のことが忘れられないとでもいうつもりか。あの死んでしまった男を。——ふん。あのとき、たしか

に薬物を用いたが、ああまで見せつける必要などないはずだ。まして、あの男は殺人鬼じゃないか。——この女、軀の中はこんなにひくついているくせに、この十年、いったい何を怵えているのだ。おまえはおれの所有物にすぎない。おまえは生涯、おれのものしか受け容れられないのだ。——それにしても、ただ一度のあの男のものがそんなに逞しかったのか……。おまえの汚れた場所をこうして清めてやる。どうだ、これでも声をあげないつもりか……。くそ。能面のような顔をして……。くそ。おまえなど、とうにまともな人間じゃないんだ。おまえは鬼の子を生んだのだから……。)

(……怨んでいるわ、憎んでいるわ、蔑んでいるのよ。それが分かるかしら。いくら激しく突き立てたって、ああ……。悦ぶものですか。——騙したうえに媚薬まで吞ませて……。あの独房に押し込め……。あなたに酷い人よ……。忘れないわ……。でも、あの男は違った……。乱暴だったけれど、優しくしたわ……。そして囁いたのよ、おれの胤を孕むのだ、と。——よくも、私のあさましい姿を父にまで見せたわね。格子窓からあなたたちが始終覗いていたことは知っていたのよ……。あなたも父も獣以下よ、人間なんかであってたまるものですか。——私は許さない、絶対に許せない。あなたはあの男の子供を手に入れるためだけに、強引に私を妻にしたけれども、私はあなたの妻になってこうして復讐してやるのだわ……。あの男との狂気のようなセックスを、もっと想い起こしなさい。嫉妬の炎をいっそう燃え立たせるがいいわ。——さあ、もっともっと突き立てなさい。ああ……。歯を喰いしばって、そう、こうやって、私は堪えぬいてみせるわ……)

憎悪に充ちた激越な二人の言葉が、あくまでも静謐さを装っている夜の真実の姿なのだろうか。それとも、それは、空中にとどまっている早彦の妄想がもたらした言葉だったのだろうか。彼らの言葉の意味が捉えきれぬともいうように、早彦の塊は収縮を始め、早彦自身は熱を帯びているように感じていた。何かの気配を察したのか、それとも生理的な

臨界点に達しているのか、憔悴し脂ぎった男の顔が天井に向けられた。予備燈に照らし出されたその顔が、早彦には父親の矢継院長のもののように思われた。けれども、それを確かめる暇もなく、早彦は自分の部屋に戻っていた。

——異変はその直後に起きた。それは、生まれてからかつて味わったことのないほどの極端な不安の感覚だった。目にしていないものは、横たわった自分の軀の他には、見馴れた机であり本棚であり寝台であり、何の変哲もない自分の部屋の内部だった。しかし、得体の知れない不安が、変調をきたした危機意識とともに一挙に昂進したのである。まるで、感覚が丸裸にされ、通常感ずることのできない世界の異様な動きが、棘のように意識を貫き、過敏になった意識が悲鳴をあげているような気がした。あらゆるものから無防備になっている早彦は、このような事態に遭遇して、再び元の肉体に、眼下のガラス細工のような軀に戻れるのだろうかかと怯えた。その思いは、恐怖と名づけるべき性質のものだった。同時に、浮游している自分の周囲に、目で見ることのできぬ、強烈な、あまりに異常な危険が到来しようとしていることを察知していた。——永久に魂と肉体を分かちつもの勢力が、無限の彼方から襲いかかってくる。そう考えたとき、早彦は、目覚めなければとんでもないことになる直感した。——死を支配し、魂を滋養とするものの手先が狙いを定めている。そのような気配が濃厚に蟠って、早彦を拉致するようにも思われた。意識と肉体の隔たりの空間が凝結して、肉体へ還る動きを阻んでいた。そして、急いで肉体に潜り込もうとしたが、すでに容れ物自体が拒絶反応を示し始めており、大きな困難にうちひしがれた。それでも、ようやく元の場所に戻り着くことはできたのだが、凄じい恐怖によって、肉体も意識も張り裂けんばかりに戦っていた。早彦は恐怖に逐われるようにして、肉体ともども覚醒しようと試みた。だが、それは峻烈ともいえる肉体の激痛を伴った。全身麻酔から瞬時に蘇生するときのような、

筆舌に尽くしがたい麻痺がその正体だった。肉体は微動だにせず、鮮烈に痛点を開いた感覚器と、中途半端に弛められた痙攣性の麻痺が、早彦全体を押し潰そうとしていた。

早彦は、どこでもいい、体のどこか一部分を動かすことさえできれば、この苦痛から、この悪夢から逃れられると思った。それは意識と肉体の接続を意味した。全神経を集中し、死力を振り絞って、なんとか右手の人差指を動かそうと努めた。けれども臍の上で組まれた指は質感を恢復せず、隣の指や絡められた左手の指との接触感も生じてこない。早彦はさらに力を置めた。突然、まるで数万ボルトの電流を浴びたかのような衝撃が全身に疾った。そのとき、早彦の人差指がわずかに動いたのだ。

憑かれたかのように目を睨んでいる早彦の全身は汗にまみれていた。体重が半減でもしたかのような深い脱力感に囚われていた。

——このことがあって以来、早彦は、肉体から脱け出ようなどとは考えないように努めた。

ところで、早彦は幽霊を見ていた。研究室の窓辺から戻ってきて、どのくらいの時がたったのだろうか。容易に寝つかれないので、思いを決めて肉体と魂の分離の術を試みていたのだった。その程度を、催眠剤替わりになるくらいのもに控えようと考えていた。寝台の白いシーツの上で、細い軀を人形のように静かに伸ばし、心臓の上で指を組む。半覚半睡の状態をめざしながら、夢を見るようなつもりで、ただ意志だけを鞏固にしていた。やがて肉体の感覚が失われ、ゆく。いまだ——、早彦は考えていた。いま、軀を脱け出すことも、夢を自在に操ることもできる、と。

幽霊が訪ったのはこのときだった。部屋のドアが鍵のかつてあるのに、もかかわらず、音もなく開き、すでにその前には、白っぽい、やや薄汚れた長い布を肩からすっぽり纏った男が、目を爛々と光らせて、漂うこ

とくに行んでいた。

おれの胤、おれの分身、一族の者よ——、幽霊は語った。いや、語ったわけではない。そのような思念を、心と心をつなぐ対話の術で、早彦に言葉告げたのだ。

——おれは十三年前に、悪逆無道の罪人として死一等を与えられた。爾来、悪逆の念としてこの世を呪いつづけていた。おれは特別な悪人だ。だが、どうしようもなく純粋な血を持った男だ。おまえの母親は自ら進んで、このおれに抱かれたのだ。

早彦は、忌わしい緊張感などというものに囚われない自分に驚愕していた。幽霊の語る言葉がよく呑み込めぬままに、ぼんやりと寛いでいた。なつかしい匂いを嗅ぐような気もした。

その幽霊は物質として存在していた。夢魔や妄想の類とは思われなかった。手を伸ばせば確かに触れることのできる、物そのものの性質にあふれていた。長い髪の毛や顎を蔽った髭、全身を包んでいる布が、窓から侵入する夜風に煽られ揺れているせいでもあった。けれども、その質感、その波打つ動きは金属的な硬直性を持ち、機械的な顫動を思わせた。だからなおのこと、幽霊の表情や仕種はこの世のものとは思われぬ脆弱な印象を与えていた。自働人形のぜんまいが跡切れようとして、最後の癌にうちふるえる瞬間のごとく——。その繊細さは、早彦の捏造する夢の中の登場人物に共通する、いつでも存在を何か別のものに転換できる性質の現われでもあった。肉体そのものよりも、それ以外の部分に濃厚に感じられる存在感——。表情や仕種の妖異さ、独特の雰囲気は、おそらくそのような部分から発しているのだろう。見つめつけると、あまりに酷薄な冷気が伝わってきた。それはまさしく空間の虚無だった。身も心も凍結させる空虚であった。

——おれが何ものか、おれの本体が何であるか、おまえは見なければならぬ。おれはありきたりの蒙昧な亡霊どもとは異なるのだ。いいか、よく見ろ。おれの衣の下を見ろ。

闇に鎮されている部屋の中で、幽霊を中心に、夜より暗い、真黒な渦が巻いているように感じられた。至るところで微細なまでに振動する空気の、その全ての粒子が、早彦の全身の肉襲に鋭利な歯牙となって喰い込み、噛みついていった。幽霊は振り払うような素早さで薄汚れた布を放ち、その大きな布は嵐の海面を漂うように宙を舞った。凍りついた早彦の眸が布の向こうに捉えたのは、凄絶な青味さえ帯びた、どこまでも貫いて透き通る空間だった。何もものない荒涼とした空虚、無そのものの上に、首だけが浮かんでいた。そして、空洞に固着した首が奇怪な表情のまま硬ばって、身動きひとつできないでいる早彦を睨めつけていた。

どれほどの長い時間が経過していたのだろう。本当はわずか寸秒のことだったのかもしれない。浮游する顔は初めから色彩を失っていたが、首だけになると、褪色した薄い皮膚はみるみる潤び、ついにはかさかさになって剥落していくのである。鼻梁や耳朶もその形を崩し、軟骨がこぼれ落ちる砂のようにさらさら音をたてて空中に四散していく。ただひとつ、その姿をとどめているのは、剥き出しになった裸の眼球だった。網目状の毛細血管に絡みつかれ、燦火や鬼火を思わせる血の塊となって膨んでは委む眼球が、闇の中で妖しく炯々していた。——なんというおぞましい事態。死そのものの無機性である頭蓋骨の中央で、不吉な生を暗示する怪異な二つの眼球の蠢き。早彦は、睡眠時の臉の下で活潑に跳ね廻る眼球運動の、見るこへの異様な執着を思い浮かべた。

觸體は空中の一箇所にとどまることをせず、後方に退いてはまた早彦の目前まで迫り、まるで球面を無軌道に滑りつづけるようにして早彦を感圧し、執拗に、見ろ、よく見るのだ、と繰り返していた。そのうちに骨の廻転体に象嵌されている眼球の、青灰色の中心近傍も、どんより濁った暗灰色に変じ、血脈によって隈取られていた暗褐色の外縁部も、潤いた黒い色へと色調を落としていった。それからしだいに眼窩の闇へと沈んでゆき、そのあたりは落ち窪んだ翳りだけがつつく深い洞窟を思わせた。

形骸と化した觸體はそれでもなお飛び廻り、幾度となく早彦の目の前に迫っては、純白に光る歯ばかり並ぶ口蓋を噛み合わせ、まるで早彦の細い喉笛に喰らいつこうとでもしているように見えた。闇に浮かぶ白い觸體、それは己れの軀を捜し求めているかのようだった。——おれは頭蓋骨だけで生き永らえているのだ。おれの輪廻転生はこの頭蓋骨に凝結し、おれの呪いも、おれの残虐無比も、ここにきわまっているのだ。觸體は宇宙の一点に静止して、闇の根源である暗黒の点のように、そこだけ無限の深い暗がりをつくり、暗箱の中にしかありえない絶対黒色の描線で、頭蓋骨の全ての稜線を描き出していた。

——わが裔よ。数万年を古りたわが血の族よ。おれたちは頭蓋骨だけで生きています。おれたちの永劫の魂はこの骨の中に封じられて、決してどこにも去ることはないのだ。おれたちの肉が減じようと、おれたちは地を充たす地の塩となって、死ぬことはない。時がおれたちの味方だ。世界の滅びも、おれたちには無縁だ。

早彦は、静止したまま地の底から湧き出るような暗い言葉を告げる幽霊の、いまやただひとつ残された觸體に、一角獣のような角が生えているのを認めた。そして、その觸體が、研究室に秘匿されていた頭蓋骨そのものであることを理解した。

——おれたちは純粹に本来的であって、冒されるべきものではない。なぜなら、わが眷属は人類の唯一の始源だからだ。おれたちには全てが許される。わが眷属は神なるものさえ凌駕する族だからだ。

年若い早彦に、幽霊が何を伝えようとしているのかは分かりようもなかった。だが、なぜか、不思議な感銘を受けていた。数万年を経た儼莫い澱んだ空気が体内を侵しているように思われた。なつかしい死者たちの塩が、部屋に、体内に充ちている。早彦は、名づけようべきもない戦慄が兆しているのをおぼろげに知った。

闇の本体と化した觸體は、全ての暗黒を呼び寄せる動きを終熄させたように見えた。そして、その暗黒自体がまるで光の性質をもつものの上

うに、漆黒の闇を黒々と燦かせた。次の瞬間、髑髏は周りの何もかもを根底から破壊するような凄じい速度で部屋の中を疾った。その行手には光を遮るカーテンと窓がある。早彦は、遮蔽するあらゆるものが吹き飛び、大きな爆発音とともに粉々になるさまを予感した。そして、粉碎時の轟音が耳に達したかのような錯覚に囚われた。しかし、髑髏は窓に衝突すると同時に、まるで吸い取られるような具合に、音をたてることもなく、忽然と姿を消したのだった。

呪縛を解かれた早彦は弾かれたように寝台から飛び起きると、カーテンをはねのけ、ガラス窓を開け放った。明るく澄んだ朝の光がいちどきに注ぎ込み、地上のいかなるところをも照らし出す太陽が山の端から眩い姿を覗かせていた。仰ぎ見れば、広大な空は、真夏の一日の始まりに似つかわしい、目のさめるような青空だった。惜しげもなく溢れる早朝の清々しい光の洪水の中で、病院の窓という窓が空の色を映し、鮮烈な山々の緑を映して輝いていた。

早彦は悪夢から覚醒したような安堵を抱いたが、思い直して身を乗り出し、階下の一部屋の窓を見やった。光の充ちている世界の中で、研究室の窓だけが絶対の暗黒を保っていたのだった。

七

鶉町は山並に挟まれているため、盆地にみられる気候の特色を備えている。寒冷な土地柄で、ただでさえ冬の寒さは苛烈をさわめるといふのに、短い夏の間だけは気の遠くなるような暑さに襲われた。生れてこのかた何十年もこの町に住み暮らした人でさえ、その暑さにはとうとう順応できず、噴き出る汗と体の変調に閉口して、誰彼かまわず不平をぶつけるのだった。それでも、昼下がりがりも過ぎ、暑さが少しばかり収まると、

ようやく短い夏の暖かさを堪能しようというのか、町全体に静かなけだるさが広がっていく。

松林や限徑の深い緑の葉叢が柔らかな陽差しを浴びて小波のように光っている中を、赤く塗られたディーゼルカーが通り過ぎていった。国鉄鶉線は単線軌道であり、函館本線の停車駅をもつ隣市との間わずか七・四キロを一時間に一回折り返し運行している。けれども近頃では、その便数も二時間に一本程度に減らされていた。午後も遅く、時間がのんびりと流れている頃に、乗降する客の数が多いわけもなく、走りつづけるディーゼルカーの窓から覗く人影もまばらだった。この乗客専用車の往復する合間には、貨車が満載した蒸気機関車が濠々と煙を吐きながら、ひどくゆっくり動いている。町の全てが午睡に入っているかのようだった。

いかにも平穩無事に日々が移ろっているように見えたが、そうした長閑な午後にもかかわらず、人々は安逸な眠りに就くどころか、ひどい悪夢にうなされていた。政府のエネルギー政策の転換が引き金になって石炭産業は危殆に瀕し、炭鉱地帯は深刻な不況に直面していたのである。またそれに輪をかけるように、鶉町ではこのところ落盤事故やガス爆発が相次ぎ、鉱山会社はいくつかの坑口を閉鎖し、経営規模の縮小に努めていた。人々は住み馴れた町を後にし、活路を大都市に求めざるを得なくなり、炭鉱離職者問題が深刻化していた。急激な人口の減少を目の当たりにして、鶉町では各層の知名人を招集して再建懇談会を組織したが、もはや炭鉱町の崩壊をとどめることはかなわなかった。

幽霊を見た夜から数日後の日曜日、早彦は人けのない静まり返った病院の一階に降りて来ていた。父親の矢継院長は再建懇談会から出席を請われ、午後から留守にしていた。昼下がりがりもとうに過ぎて、診察室や薬局の窓の薄地のカーテンを透かして到達する淡い光と、光の当たったカーテンの布地から発する日向臭い匂いに充ちていた廊下に、しだいに薄暗さが増してきていた。早彦は診察室の隣にある部屋のドアを前にして

行んでいた。そこは、入室を厳禁されている矢継院長の研究室だった。病院の一番奥に応接室があったが、矢継院長は仕事を終えるとそこで白衣を脱ぎ、院長宅に繋がるもう一つのドアから自宅に戻ることにしていた。早彦は応接室のコート掛けに吊り下げられた白衣のポケットから鍵束を持ち出したのだが、それには同じような鍵が数十本、数珠繋ぎにされていた。けれども、前に食事の始まりを知らせに来た折、開かれたドアの錠に刻まれている記号を目の端で盗み見ていたので、符合する鍵を選び出すことは造作もなかった。廊下の側は薄暗くなっていたが、ドアを開けるとカーテンの蔭から夕陽が差し込み、研究室の中は夕焼けの色に染まっていた。

窓際には父親の広い机が置かれ、入口の傍に簡単な応接セットがあった。ぐるりの壁には医学書や変色した書類などを収蔵した書架と、深夜に覗き見たときのあの標本棚が並んでいた。部屋の一角に孵卵器があった。その前面の扉が透明な覗き窓になっており、中に数箇のシャーレが取まっていた。早彦はそのシャーレの中に、微のような緑色のものが浮かんでいるのを見た。その隣にある遠心分離器の蓋を開けると、大小の試験管が数本、テープで色分けされ、その中にそれぞれ濃淡の異なる緑色の沈澱物を溜めた液体が入っていた。早彦は何の病原菌だろうと疑問を抱いたが、気味悪くなって元通りに蓋を閉じた。

電子顕微鏡が固定されている機の抽斗を開けると、一冊の分厚いノートと、何葉かのレントゲンフィルムの入った紙袋が目についた。ノートを机の上に取りのけ紙袋からフィルムを取り出してみると、褪色の具合から、それらはかなり古い時期のものであるように思われた。そのうちの一枚を机の上のスクリーンに貼りつけ、ライトのスイッチを拵ってみた。光の中に頭蓋骨が白い光芒となって現われたが、それを見て早彦は奇異な印象を受けた。側面から撮られた頭蓋骨の形が、これまで知っていたものと随分違っていったのだ。早彦は数日前の深夜の光景をいままた明瞭に想い起こし、愕然たる思いに囚われていた。

灰色に光るスクリーンをそのままにして、早彦は標本陳列棚の方へ歩み寄った。醜怪な姿のまま瓶詰にされた嬰兒たちの、臉の裏側で白濁している眸が一齐に睨いて、こちらを見つめているような気がした。いつのまにか夕陽はすっかり翳り、研究室の暗がりには、頭蓋骨を映し出しているフィルムを透してスクリーンの蛍光灯の明かりが薄ぼんやりと洩れているだけだった。霧のようなその乳白の光が、反対側の棚に並んだ頭蓋骨の標本を頼りなげに照らしていた。早彦はその中から一目で変形しているのと分かるものを選び取り、細い指を開いて両掌で抱えた。

夏の午後のぬくもりが掌を伝った。まだ生温かい頭蓋骨の手触りは、燃え尽きた石炭の残骸のようにざらざらとして、乾燥しきっていた。けれども、じきに、汗ばみ始めた早彦の掌が表面に湿り気を与え、手の跡が影のように残された。早彦は、光の源を蔽い、その光を塞ぐように貼りつけられたフィルムの白い影を振り返った。わずかに頭部の形をして洩れ出た灰白い光の暈の中で、早彦の眸が青々と輝き、瑞々しさを増していった。白目の部分の面積が大きいため、眩かれた眸全体が冷たい光を帯び、酷薄そうに見えた。早彦の指が頭蓋骨の変形した箇所を擦っていた。

「つの——」

そのとき、閉めておいたはずの研究室のドアが小さな金属音を発した。早彦はその音の方に、思わず鋭い目を向けた。かすかな軋り音をさせて開いたドアの向こうの闇に、蒼白い、あやふやな顔が揺らめくように浮かんでいた。言い知れぬ恐怖が早彦を打ちのめした。背筋を、この世のものとは思われぬ辛辣な冷気が疾ったのだ。それはあの夜の親和的な性質を持つものとは異なっていた。醜い皺が無数に刻まれ、脂気のすっかり失せた濁いた顔、そして白髪混じりの頭部が仄明かりに照らし出されると、悪相そのものに出遇ったように感じた。いつのまにか、そこに有木老人が立っていた。

早彦が、抱えていた頭蓋骨を取り落としした。頭蓋骨は得体の知れない

妖しい力に衝き動かされたように掌の中を滑り、早彦の体がふいに萎えてでもいくような頼りなげな危うさに囚われ、あたりはいっそうの静寂に浸されていた。時間がその瞬間だけ滞っているかのようだった。しかし、あの夢の中で頭蓋骨が闇を引き裂くような動きを見せたのとは反対に、頭蓋骨の標本はその突起を重力の方向に向けながらゆっくり廻転し、リノリウムの床に吸い取られるように、あまりに緩慢な時間の流れのうちに落下していた。それでも早彦は、夢の中の出来事と同じに、頭蓋骨がこの世に存在していたことが嘘であったかのように、地下の不吉な世界へ姿を消してしまうもののように思っていた。だが、早彦の期待に反して、頭蓋骨は暗がりの中で乾いた音を響かせて粉々に砕けたのだった。「そこで、何をしている」

低いくぐもった声音で、有木老人がゆっくりと呟くように訊ねた。その声は身を凍ませるに足る、不思議に力の單もったものだった。早彦は貫くような老人の声のためばかりではなく、より深い闇の彼方から訪れる本源の力にふたたび打ちのめされてでもいるのか、激しい眩暈に襲われていた。上体が揺すぶられるように感じたとき、その細い、骨ばった肘が標本棚に並んだガラスの容器の一つを掠めた。鳥の鳴き声のような鋭い音をあげて、胎児の入った瓶に亀裂が走り、洩れ出たフォルムアルデヒドの液が早彦の腕を濡らした。早彦は死の液から自分の腕を庇うというより、瓶の中から胎児の死体がこぼれ出ないように、倒れかけたガラスの容器を掌で支えようとした。そしてそのとき、容器の表面にできた疵に触れた指がわずかに切れたことに気づかなかった。

「この部屋に入ってきてはいけない」

その声に叱責の調子は置かれていなかった。あくまで淡々として、また妙に余韻をひきずる声だった。しかし、レントゲンフィルムから洩れるか弱い光を受け、蒼白な光の影響で冷たく浮かび上がった老人の顔には、次第に唳しさが増幅され、眼窩の奥に有無を言わせぬ厳しさが湛えられていた。その鷹のように鋭い目が早彦の白い指から滴る血に向け

られたとき、老人の表情がみるみるこわばり始めた。早彦の赤い血液が床に散乱した頭蓋骨の骨片に、間歇的に注がれていた。そして次の瞬間には、その滴が骨片に沁み込んでいったのである。

早彦の去った研究室に独り立ち尽くす有木老人は、肩を落としたまま部屋の中をどくともなく、しばらく打ち眺めていた。その姿は、暗闇に溶け入る亡霊のようにはかなげだった。傍の机の上に、矢継院長の古びた研究ノートが残されていた。老人は老いた体を屈め、血の沁み込んだ骨片を拾い上げると、黝んだ唇をかすかに綻ばせ、「人間は脆いものだ。魂はもっと脆いが、肉体はさらに脆い」と、力のない呪詛を洩らした。

直江屋主人曰く

情況とか狀況論ということがいわれられていたのはついでこの間だったような気がするが、いつのまにかそのようなこととは影を潜め、近頃ではいろいろのことが相対化されているようで、それに伴って現実といものが宙に浮き、その意味あいも下落しているらしい。いつそこのような現実を指して狀況の現実と呼ぶのも一興かもしれぬ。なぜなら、この現実とは、すぐ影を潜めるような状況性であるらしいからだ。

その狀況的現実の中で、情報という問題は最もホットなものといわれる。そういえば、この十数年来のソ連情報に關する工作の成功は瞠目すべきものである。またそのような伏線に沿って、大韓航空機事件、アキノ暗殺、ラングリン事件などを眺めると、このアジアでの生々しい動きがはたしてロスアンゼルス・オリンピックに繋がるものかどうかは知らねど、なにやら筋の通ったシナリオが浮かぶのは当方のうがちすぎか。

ところでそのオリンピック、高邁なスポーツ精神、世界平和などというのは赤兎の寝言にしても、現代世界のチャンプであるアメリカがその総力を集めたにしてはなんともチャチで子供騙しの感は否めない。成金趣味は致しかたないが、飛行船、人間ジェット、聖火ランナーの茶番劇、点火の際のくだらぬ仕掛、大統領の大根役者ぶり……、開会式を見てさえ、どこに今世紀最大の国家の力と知性があるというのか。このところ過激になつてきている謀略の仕掛人たちの粗雑なプランと同じで、底の割れるような浅薄さである。

その様子が衛星中継で日本に同時に伝えられるのだが、TVの箱の中だけの熱狂というわけで妙に白々しい。TVから伝わるものは感動やら昂奮を強制するのだが、そんな手に簡単に乗るものではない。近頃流行っている演出技法に、この強制、つまり無理矢理にプームを捲えろというものがあり、これが成功しているといつてはまた強制する。もちろん流行などというものばかりでなく、政策的見地から意図的に優先させられる情報というものもあるのだが、TVの箱の中の存在はそのような情報と交接しているがゆえに、いつのまにか世界の中心が箱の中にあると本気で錯覚しているらしいのも愛嬌というものだ。

もともと文化というものが現象といわれる形で切り取られるとき、そのような性質を發揮するようだが、このところの文化の狀況的現実でさえ情報の力といわれるものに支えられているように思われる。いわゆるマスメディアである。一方の極には発行部数数百万部の全国紙を頂点とする活字メディアがある。一新聞で数百万部とは大きな威力を持つかに見えるが、読者対象人口を仮に五千万とすると、数百万部とは全体の十分の一、つまり十人のうちの一人に対する一方的な情報伝達で、その情報が納得して受け容れられる確率などはお話にならぬくらい低いものであり新聞という存在が思っているほどの力など、言うほどないと思わねばならない。文化のリーダーシップなどというは恥ずかしい話である。そればかりか、新聞など目の前を通過するインクのにしみにすぎない。ましてそれ以下の出版文化、とくに現代的（つまり、より区切られた時間内の、より狀況的な現実という時間内に適合した）とされていく狀況的文化などは蚊の鳴く声にもなりはしない。

また、もう一方にはエンタテインメントを軸にしたTVなどの電波メディアがある。エンタテインメントとはた

*連載詩集「空中の書」は前号で終りました。ご愛読ありがとうございました。

*本号は水津燧（みなず・ひとる）の作品を中心にデザインしました。いかがでしょうか。

*このところ、寄稿・投稿などがグンと増えております。様々の分野で活躍する諸兄の積極的な参画は大いに歓迎するところです。

*改めて次号の予約を募りますが、毎号部数が増えているのですが、そろそろ限界と思われまます。五号は来春発行の予定ですが、小誌の円滑な継続を図るためご協力下さい。

だの商売である。文化の形は商売になると見定めた商売という存在の中の、囚われた文化らしき存在が、状況的現実を作っていると思い込んでいたのだが、これも根も葉もない不毛の現象である。TVなど、壁の片隅のただのしみである。スイッチを切れば消えてなくなるしみに、何の力があるというのか。

かてて加えて、近年開発急のニューメディアは、たしかに現在のエンタテインメント中心の状況的文化的のありようを根本から変えてしまふのかもしれない。だが、ハード面の研究に比して、ニューメディアによる情報自体を使用者がどう選択し、どう吟味し、いかに活用するかというソフト面が欠落していることも事実である。そしてそれもまた状況的現実というもののお粗末さの表れでもある。けれど、そのようなことは瓊まなごだ。

つまり、情報の量が膨大になり多様化しているということ自体すら、ただの状況的現実 錯覚された現実すぎぬからである。それゆえ、それを吟味選択し、自らの味方に仕立て上げ、有効に活用しようなどは本末転倒なのである。ハードウェアが先行しているという事は、いかな情報といえども管理と制御の洗礼を受けねばならぬという事である。そしてこの情報交通の基本構造がハードウェアの設計思想として決定づけられているのだから、裸の情報などその性格からおよそありえぬわけだ。

だが、たとえばINSなどの際に郵政官僚の情報掌握の魂胆が見え透き、さらにその奥に階級的意図や帝国主義の意志の貫徹などを指摘したところでもあまりに当然すぎて面白くない。ただ、情報という現代社会(状況的現実)の最尖端の問題といわれるものにして、その裏にあるものが露骨にすぎ、露骨であるがゆえに逆に現代社会というものの程度の低さを知らしめることになる。

ここで文化ということに話を戻すと、たとえホームオートメーションが完成し、ニューメディアによって包囲され、新たな文化的関係を強制されようと、すでに人間は存在するものをただ存在しているとは見ないのであるから、また情報にどのような意図や操作性が装置されているようにも、肉に触れうる直接性以外はじかに、あるいはその意図どおり正しく把握するつもりなどないのであるから、ただ単に一つの妄想の中で消化することである人間は人間である。つまり人間は肉でしかないわけであり、その意味では人間の生活に大きな変動を期待するなどは愚の骨頂である。文化とはもともと大きく深いうねりから突出するもので、目先のつまらぬ選択やパリエーションの自動化から生み出される泡沫現象とは関係がない。そして、そのようなことをわきままえないで流布されるくだらぬ心理実験など人間の尻尾だ。

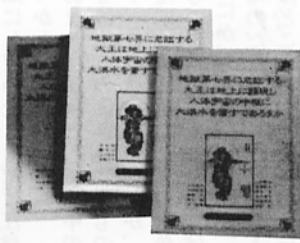
メディアの器は自らを特殊世界化するが、傍目にはその周りの空間につきものの微小な激みでしかない。いかに高度な情報性を有するが、その存在が喚びたてようが、メディアはただの存在のしみである。我々は退屈しにぎに壁面のしみから様々の事柄を妄想するが、メディアというしみにしたところで、そのような何でもない作業のうち他のものと区別もなく呑み込まれてしまうのである。

それゆえ我々のなまじることといえ、状況的現実がチャンネルを切り換えるようにくるくる変動しようと、惑わされることも振り回されることもなく、飽きたらいつでもスイッチをOFFにして、ただただ自らの裸の思考のうち、妄想すべき世界の根をしっかりとつかまえて作業するというだけである。

左の二点をご希望の方にお願ひいたします。在庫僅少のため、申込順に発送いたします。

*「地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人体宇宙の中枢に大洪水を齎すであろうか(略称フネ)」創刊号/魔刊号全三号揃(昭和五十年九月)昭和五十一年四月刊 頒価各五百円

執筆 天沢退二郎/入沢康夫/金石稔/山口哲夫/帷子耀/青木はるみ/他
今回頒価 三号揃 千五百円



*紙田彰第一詩集「浣腸遊び」

Enema Game (昭和四十九年十月刊、定価千三百円)

今回頒価 千三百円



緑字生ズ 第四号*昭和五十九年十二月十二日発行*定価 千五百円*編集発行人 紙田 彰*発行所 東京都江戸川区西葛西五一八一七一九〇六 直江屋*振替 東京一四〇一五七*電話 〇三二六八六五九一五*印刷所 共信印刷

(二点とも、送料は当方負担)

師走の空というのは、いかに晴れた日であっても、なにとはなく白々とした空虚さに満ちている。それはかりか、光の色あいすら妙に佳しく、寒風が吹き渡るといふのに、ふっとこの土地を古い眠りに就かせるような気がする。

尾張町という名の頃おい、その先の四辻から歩き始め、三十間堀を眺めやりながら三原橋を渡ると、その先に古い武家屋敷の海鼠壁がつづくのだが、時折その壁面に歌舞伎座やら映画館やらレストランなどの影が映るような気がした。そのまままっすぐ、築地川に架かる万年橋から築地御坊へ歩を進めると、山高帽とステッキ、パラソルと襷の多いドレスという扮装の外国人の男女と擦れ違つた。冬だのにと思つたとき眼の隅に眩しい光が入つたので、後ろを振り返ると、見渡せるかぎりの建物という建物の壁が白く照り輝いているのだつた。それはもちろん、陽光を浴びたビルディングの姿なのだが、動きのとれぬ自動車や着ぶくれした人々でこつた返す銀座四丁目は言うに及ばず、埋められた運河の上で名前だけになつてしまつた橋まで、その白い光で隈なく蔽われてしまつていた。

晴海通りを勝鬃橋へ下つていく道すがら、五千石の旗本屋敷が明治になつて築地の梁山泊と呼ばれ、さらに後年、料亭へと生まれ変わる話を思い出した。インドの大伽藍を髣髴させる西本願寺にしても、江戸海辺坊舎、浜町御坊、築地御坊とその名称と姿を変えている。建物の転生など聞くべくもないが、いつそ魂の形態といふことに譬うれば、転生といふのではなく、何ごととも済んでしまつて取り返しがつかぬだけのことだ。取り返しのかかぬことへの哀切だけが残つて魂といふものの形なかもしれない。

ところで、このあたりを訪れたのは一パイの河豚にありつこうと思つたから

ストリート・ジョン・リュー・デラ

だ。目当ての店は込み合うので、白子が品切れにならぬうちに早くから出て来たのである。古来、河豚を食すことは禁じられ、ようやく昭和十六年に解禁されたといふが、「河豚食へば鬼も仏もなかりけり」といふわけで、下関からブリキ罐で送られてくるのを明治の頃には汁や鍋にしていたようだ。江戸時代にも雪輪の河豚とあり、いっそうこの季節に似つかわしい。

波除稲荷の前を抜けて魚河岸に入ると、あまりに深閑として日中のこととは思えない。小鱈の青い肌は朝の感じがするとは生きのよさをいうものだが、この一帯では昼は夜なのだ。白い光の中の眠り、この違和感のためか、なにやら存在があやふやになつていふような気がした。汐留川の向こうの景色、つまり御浜御殿、延遠館、浜離宮へと変わりゆくものの景観さえこの危うげな驕りを帯びていふように見えなくもない。いつのまにか、「夢の破片は泣く」「世界の涯が自分の夢の中にしかないことを知っていたのだ」と言い残した二人の詩人の顔を思い出していた。そして、孤独になればどこにいても何をしても同じことだと思つた。三日肉食せざれば骨皆離るといふのは魚肉のことだが、三日夢を見ざれば魂は離れていってしまうのだろうか。たしかに、死んでしまつた方が見事だと思わるときに死ぬる人もある。

「ハイヨ」と鯛が通る、ヨツシヨと鯛が通る、御免御免と鯛が通る。この往來は右も左もない。海の中であつたやうに、鯛でも鯛でもものさばつてゐる。たゞ人間ばかりが、細い路を前と後とで押合つてゐる。これは築地に移転する前の、日本橋の方の股賑ぶりを綴つた記事なのである。

さて、海中より出現したといわれる波除稲荷の御神体と、浦島の夢を啖う竜宮城とは、何か繋がりでもあるのだろうか。